

シテ、教授ガ官吏ナリト假定スルモ、此教授ト稱スル官吏ニ言論ノ自由ヲ與フルヲ宜シトス、通常ノ行政官ハ上長官ノ指揮命令ニヨリ動クモノナルヲ以テ、時ノ政府ノ政策ヲ論評スルヲ得ザルハ無論ナリ、尙適切ニ云ヘバ政府ノ政策ニ反對スルヲ得ザルハ當然ノ事ナリ、然レドモ教授ハ斯ノ如キ事ニハ無關係ナリ、學術上反對ノ意見ヲ述ブルモ差支ナシ、斯クノ如ク自由ヲ與ヘザレバ學術ノ進歩ハ覺束ナシ、歐洲諸國ノ制度ヲ觀レバ大學教授官吏タルモノアリ、又然ラザルモノアリ、然レドモ文明諸國ニ於ケル教授言論ノ自由ヲ有スル事ハ論ヲ俟タザル所ナリ、獨逸等ニ於テハ教授ハ官吏ナルニモ拘ハラズ、言論ノ自由ヲ有ス佛國モ亦然リ、是ニヨリテ之ヲ觀レバ大學ガ經濟上獨立ヲ保タザルニモセヨ、教授ニ言論ノ自由ヲ與ヘテ差支ナキノミナラズ之ニ其自由ヲ與フルハ必要ナル事ニシテ、實例モ亦多シ、我日本ニ於テモ教授ハ官吏ナレドモ夫レニモ拘ハラズ自由ヲ有スルモノトナサザルベカラズ、教授ハ官吏ナルニヨリ言論ノ自由ナシナドイフハ大ナル僻論ナリ、要スルニ大學ノ獨立トイフ事ハ最モ望マシキ事ナリ、然レドモ獨立セズトモ大學教授ガ言論ノ自由ヲ有スベキハ是レ素ヨリ然ルベキ所タリ

## 六十一、日清協約ト滿洲ノ經營

(明治三十九年二月十日外交時報所載)

「ポーツマス」條約締結ノ後ニ於テ前内閣ハ如何ナル態度ニ出ツルナラントハ日本人民ノミナラズ世界萬國ノ注目シタル所、其際ニ於テ小村全權委員ハ突如トシテ起ツテ北京ニ行キ又々清國ヲ對手トシテ滿洲ノ處分ニ關シテ交渉ヲ開始セリ、形容枯槁顔色憔悴ノ病軀ヲ以テ東奔西走此ノ如キ重大事件ニ從フ誰カ小村全權委員ニ對シテ同情無カラシヤ然レトモ世人ハ其時既ニ日清協約ノ必ズ失敗ニ終ル可キコトヲ豫期シタリ

「ポーツマス」條約ニ記載スルノ事項ニシテ清國ノ承諾ヲ待ツモノ甚タ少カラズ故ニ之ニ關シテ日清兩國間ニ早晚何等カノ交渉アル可キハ何人ト雖期待セザル可ラサル所ナリト雖我ヨリ急イテ交渉ヲ開始スルノ不得策ナルコトハ當時既ニ識者ノ看破セシ所ナリ如何トナレバ我ヨリ進ンテ全權委員ヲ清國ニ派遣セバ清國ハ逸ヲ以テ勞ヲ待ツノ態度ヲ以テ我ニ臨ム可キハ始ヨリ明瞭ノ事實ニシテ我若

シ急テ談判ヲ纏メント欲スルトキハ勢巨大ノ讓歩ヲ爲サザル可ラズ凡ソ外國ヲ對手トシテ談判ヲ爲スニハ其第一着手ニ關シテ特ニ周到ノ注意ヲ要ス有終ノ美ヲ收メント欲セバ必ズ有始ノ美ヲ示サザル可ラズ然ルニ前内閣ガ清國ニ對シテ談判ヲ開始スルニ付テ急ニ小村全權委員ヲ清國ニ派遣シタルハ是其第一着手ヲ過テル者其談判ノ我不利益ニ歸着シタルハ固ヨリ偶然ニ非サルナリ

夫レ日露戰爭ハ韓國ト滿洲ニ關シテ起生シタルモノナリ故ニ韓國ト滿洲トニ關シテ日本人民ノ輿望ヲ達セシムルニ非サレバ今回ノ戰爭ハ日本人民ノ眼ヨリ見レバ無意味ノモノタルヲ免レズ日露條約ヲ見ルニ韓國ノ事ニ關シテハ日本ノ主張ヲ貫徹シタルモノト謂フコトヲ得可ク而シテ其後伊藤侯ノ手腕ヲ待テ韓國ハ愈ヨ日本ノ被保護國ト爲レリ然ルニ滿洲ノ事情ヲ見ルニ今尙寒心ニ堪ヘサルモノ多シ。

「ポーツマス條約ノ追加約款第一ニ從ヒ條約實施ノ日ヨリ十八箇月ノ期限内ニ日本ノ軍隊ヲ滿洲ヨリ撤退セシムルモ露西亞ハ果シテ條約ニ從テ軍隊ヲ撤退ス可キヤ否ヤ甚タ疑フ可シ敗餘ノ露西亞ガ條約ヲ履行セズト云ハ、誠ニ意外ニ聞ユ

可キモ是即チ露西亞流ニシテ露西亞ノ短所モ此ニ存シ露西亞ノ長所モ此ニ存ス且ツ假リニ露西亞ハ約ニ基イテ其軍隊ヲ撤退ス可シト定ムルモ其軍隊ハ唯滿洲ヲ去ルト云フノミニシテ其著シキ部分ハ必ズ滿洲ノ近傍ニ駐屯ス可キハ火ヲ曙ルヨリモ明カナリ故ニ日本ガ軍隊ヲ滿洲ヨリ撤退スルニ當テハ必ズ露西亞ノ遺口ヲ見テ之ニ應スルノ考ヲ以テ撤退ヲ加減セサル可ラズ故ニ滿洲ノ事ニ關シテ清國トノ談話ヲ急クハ甚シキ失策ニシテ若シモ手腕アル人物ニシテ外交ノ局ニ當ラシムレバ姑ラク清國ヲ度外ニ措キ專ラ日本ノ利益ニ注目シテ滿洲ニ於ケル日本ノ勢力ヲ失墜セサルヲ以テ目的ト爲シ滿洲ノ撤兵ヲ急カザル様ニ取計フ可キハ論無キノミ。

「ポーツマス條約ニ於テ清國ノ承諾ヲ待ツ可シト爲シタルノ事項ハ德義上、大勢上清國ガ承諾ヲ拒ムヲ得サルノ事項ナレバ戰勝國タル日本ハ其形式上ノ承諾ヲ得ルニ汲々タラスシテ徐ロニ露西亞ノ行動ヲ視察シテ之ニ應スルノ策ヲ取ラバ滿洲ニ於テ日本ハ其勢力ヲ持續スルヲ得可キハ論ヲ待タズ然ルニ前内閣ハ事此ニ出テスシテ急ニ清國ト交渉ヲ開キ日清間ノ協約ヲ充分ニ履行スルノ方針ヲ取リ

タルノ結果今後或ハ滿洲ニ於テ馬賊横行ノ舊態ヲ演ス可ク隨テ澤山ノ日本人ガ滿洲ニ移住スル如キハ到底望ム可キニアラス澤山ノ日本人滿洲ニ住居セサルモノトスレバ東清鐵道モ或ハ無用ノ長物ト爲ルヤモ知ル可ラス日本人ガ東清鐵道ヲ掌中ニ歸セシメタリトテ日本人ハ官民トモニ揚々得々タルノ顔色アリト雖儲之ヲ使用スルニ當テ旅客モ少ク貨物モ多カラサルトキハ東清鐵道ハ適サニ日本ノ憂ヲ爲スニ足ルノミニシテ日本ノ實利ヲ増スノ具ト爲ラズ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ前内閣ハ日露條約ニ付テ既ニ甚シキ失策ヲ爲シ更ニ日清協約ニ付テ失策ヲ重テタルモノナリ此二箇ノ失策ノ爲メニ滿洲ノ經營ハ實ニ困難ノ状態ニ陥キリタリト雖日本人ノ決心次第ニヨリテハ狂瀾ヲ既倒ニ廻シテ日本ノ勢力ヲ大ニ滿洲ニ於テ擴張スルヲ得可キナリ而シテ特ニ注意ス可キモノハ遼東半島ノ經營ナリ遼東半島ニ於テ製造ヲ興コシ貿易ヲ盛ニスレバ日本ノ勢力ハ之ヨリ發展シテ遂ニ南滿洲全部ニ及ビ尋デ北滿洲ニモ及ブナラン。

(明治三十九年一月二十八日之ヲ記ス)

## 六十一、 漁業ニ關スル日露關係

(明治三十九年三月十日外交時報所載)

沿海州及樺太附近ノ漁業ニ關シテ日刊新聞ガ有益ナル論文ヲ公ニシタルハ人ノ知ル所而シテ又近頃聞ク所ニヨレバ華胄某君ハ右漁業ニ關シテハ周到ナル議論ヲ包藏シ不日之ヲ出版ニ付スルノ考ナリト云フ果シテ然ラバ余ノ論文ノ如キハ誠ニ蛇足ヲ畫クト一般ナルカ如シト雖此ノ如キ重大ナル問題ヲ默々ニ付スルハ本意ニ背クニ由リ此ニ單簡ニ余ノ意見ヲ述ベント欲スルナリ

「ポーツマス」條約第十一條ニ曰ク露西亞國ハ日本海オコーツク「海及ペーリング」海ニ瀕スル露西亞領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許與セムガ爲日本國ト協定ヲナスベキコトヲ約スト

是ニ由テ之ヲ觀レバ日本臣民ハ沿海州ノ沿岸ニ於テ漁業ヲ營ムノ權利ヲ獲得ス可シト雖黑龍江ニ溯ホリテ漁業ヲ營ムノ權利ハ右條約ノ認ムル所ニ非サルガ故ニ日本臣民ノ漁業ハ大ニ限定ヲ受ケタルモノト謂ハサル可ラズ

聞ク所ニヨレバ曩キニ小村全權委員ガ米國ニ向テ出發セントセシニ際シテ農商

務省ノ官吏ハ漁業ニ關シテ日本ノ當然要求ス可キ件々ヲ記載シテ之ヲ小村全權委員ニ送リタリト云フ左レバニヤ「ボーツマス」ニ於テ「ウキツテ」氏ト對談セシ當初小村全權委員ハ河川ニ溯ホリテ漁業ヲ爲スノ權利ヲ日本臣民ニ與フ可キコトヲ主張セシニ「ウキツテ」氏ハ一言ノ下ニ之ヲ勿付ケ小村全權委員ハ何等返ス言葉モ無クシテ其要求ヲ撤回シタリト云フ

夫レ河川ニ溯リテ漁業ヲ營ムヲ得ズトスレバ是即チ鮭ヲ取ルヲ得ズトノ事ヲ意味スル者ナリ小村全權委員ガ右ノ如キ要求ヲ撤回シタルハ日本ノ爲メニ甚シキ不利益ナルコト論ヲ待タズ此點ニ關スル農商務省官吏ノ入智慧ガ秋毫ノ用ヲ爲サザリシハ遺憾ノ極ト謂フ可キナリ

又樺太ニ於ケル漁業ニ付テ一言センニ從來露國ノ臣民中露國政府ヨリ樺太沿岸ニ於テ漁業ヲ爲スノ特許ヲ得タルモノアリ然ルニ「ボーツマス」條約ニ於テハ樺太ノ南半ヲ日本ノ領有ニ歸セシメタル結果是等特許ハ今後如何ニ取計フ可キカニ兩國全權委員ノ思到ル可キハ無論ノ事ナルニモ拘ハラズ今回ノ條約ニハ此點ニ付テ何等明記無キハ吾人一同ノ疑訝ニ堪ヘサル所ナリ

兩國臣民ノ私權利ハ兩國政府ノ蹂躪ス可キモノニ非ズ縱令條約ニ何等ノ明定無キモ理ニ於テ固ヨリ然ル可キ所況ンヤ「ボーツマス」條約ニ於テ此ノ事ニ關スル明記アルニ於テオヤ然レトモ漁業ノ特許ノ如キハ確定ノ私權利ヲ生スルモノニ非ズシテ其性質上行政權ノ作用ヲ以テ如何トモ左右シ得可キモノナルカ故ニ露國臣民ガ樺太沿岸ニ於テ獲キニ露國政府ノ特許ヲ得テ漁區ヲ有シタルモノトスルモ樺太南半ガ日本ノ領有ニ歸シタル以上ハ南半ニ於ケル漁區ノ運命ハ日本政府ノ當然ニ定メ得可キモノナリ若シ是等漁區ニシテ日本ノ爲メニ不利ノモノナラシメバ日本政府ハ其特許ヲ廢止シ得可キハ喋々ノ辯ヲ待テ而シテ後ニ明カナルニ非サルナリ

之ヲ聞ク漁區ヲ有シタルノ露國臣民ハ傲然トシテ揚言シテ曰ク日本政府ハ此等ノ漁區ヲ沒收スル權利無シ若シ強テ此ノ如キ事ヲ爲サント欲セバ露國政府ハ之ヲ列國ノ仲裁々判ニ持出シテ爭ハサル可ラズト而シテ日本ノ有志者中此ノ如キ漁區ヲ沒收ス可キコトヲ日本ノ外務省ニ向テ忠告スル者有レバ外務省ノ官吏ハ響感シテ曰ク露人ノ私權利ハ濫リニ之ヲ蹂躪ス可ラズト

尙又聞ク所ニヨレバ樺太南半ニ於テ漁區ヲ有シタルノ露國臣民中ニハ英國ヨリ露國ニ歸化シタルノ人物モアリテ漁業ニ關シテ巨大ノ資本ヲ使用スル者ナリ「ポーツマス」談判ノ進行最中ニ於テ此ノ如キ人物ハ他ノ有力ノ人物ト相携ヘテ米國ニ行キ「ローゼン」男ヲ介シテ「ウキツテ」氏ニ逢ヒ切ニ哀願スル所アリタリト云フ是等傳聞スル所果シテ信ナリヤ否ヤ是余ノ知ル所ニ非ズト雖兎ニ角此ノ如キ風説ヲ湊合シテ之ニ考フルニ樺太ノ南半ニ於ケル漁業ニ關シテ小村全權委員ト「ウキツテ」氏トノ間ニ何等カノ交渉アリタルナル可ク而シテ「ポーツマス」條約ニハ此ノ點ニ付何等ノ明記無キ等ノ事實ヨリ之ヲ推スニ小村全權委員ハ日本政府ノ保護ス可キ露人ノ私權利中ニ漁業權ヲモ含マシムルコトニ同意シタルヤモ知ル可ラズ世ニ公ニセラレタル會議録ニハ此ノ如キ事ニ付小村全權委員ガ同意ヲ表シ言質ヲ取ラレタルコトヲ記セズト雖遠慮無ク之ヲ言ハ「ウキツテ」氏ト小村全權委員トノ談判ハ耶蘇ト孔子トノ談判ノ如キ感アルニ由リ小村全權委員ガ如何ナル言質ヲ取ラレタリヤ是甚ダ知リ易カラズ

之ヲ要スルニ沿海州沿岸ニ於ケル漁業ニ關シテモ樺太南半ニ於ケル漁業ニ關シ

テモ小村全權委員ハ日本ノ當然主張ス可キコトヲ充分ニ主張セザリシカ如ク此ノ點ニ付テハ遺憾ナガラ又々失敗ノ上ニ失敗ヲ重ネタルカ如シ

前内閣既ニ倒レタルノ今日之ヲ一見スレバ小村全權委員ヲ窮追スルノ要無キカ如シト雖之ヲ再考スレバ此ノ如キ重大ノ事件ニ付テハ責任ノ在ル所ヲ明カニシ且ツ現政府及國民ノ決心ヲ催スノ必要アリ方今外交ノ局ニ當ルノ人士ハ願クバ時ヲ移サズシテ漁業ニ關シ斷然タル處置ヲ爲セ國民後ニ在リ必ズ剛強ナル外交家ヲ援クルナラン

(明治三十九年二月二十五日之ヲ記ス)

### 六十三、青年諸子ニ海外旅行ヲ勸ム (明治三十九年三月三日)

(日本之青年所載)

歴史家ハ世界ノ歴史ヲ大別シテ大古中古古今古ノ三世紀ト爲セルガ但ダ果シテ何

レノ世マデヲ大古トシ、何レノ世マデヲ中古トシ、何レノ世マデヲ近古ト爲スカニ就テハ人々互ニ議論ヲ異ニシ、記スル所一ニ出デズ。然ルモカク世界ノ歴史ヲ三紀ニ大別セルハモト各自ノ任意ニ出デシ所一ノ世紀ト他ノ世紀トノ際ダニ截然タル區別ノ存スルニアラザレバ、其孰レノ可タリ孰レノ不可タルヤヲ判斷スル亦タ容易ノ事ニアラザルナラン。「コムモドール、ベレー」ノ我國ニ來リシハ實ニ嘉永六年ニアリ、此ヨリ後、我日本ハ全ク從來ノ鎖國主義ヲ捨テ、開國主義ヲ採リ、歐米諸國ニ修好交際シテ世界ニ並伍スルニ至レリ、時恰カモ千八百五十三年ニ當リ、幾クナラザルニ歐洲ニ「クリミヤ」戦争起リ、兵連ルモノ三年、平和克復ノ後ニ及ビテ、土耳其ハ歐羅巴協調ノ仲間入りヲ爲スニ至リヌ。此ノ如ク一方ニハ我日本ノ世界ト並伍スルノ端ヲ啓クアリ、他方ニハ土耳其ノ初メテ歐羅巴協調ノ仲間入りヲ爲スアリ、我國人ノ眼ヨリシテ觀ル、今世ノ即チ當時ヨリ始マルヲ謂フモ亦タ不可ナラザルノ感ナシトセズ、況ンヤ世界ノ交連機關中ニ於テ特ニ倔強ナル海底電線ノ架設サレタル亦タ同ジク其前後ニ於テセルヲヤ、即チ始メテ英ト佛トノ間ニ海底電線ノ沈設サレタルハ千八百五十一年ニ於テシ、尋デ西洋ヲ横斷スル海底電線ノ沈設サ

レ始メタルハ千八百五十六年ニ於テセリ、然ラバ十九世紀ノ下半期以降ヲ以テ今世ト爲スモ不可ナラザルノ感ナシトセザルナリ。

然ルニ歐洲列國間ノ關係ニノミ注目スル人々ハ千八百七十年普佛戦争以降ヲ以テ近世ト爲スベキヲ論ジ、今世ト中古トノ間ニ截然タル限界ヲ畫スルモノ即チ此ノ戦争ナリトイヒヌ、蓋シ當時ニ定メラレタル歐洲列國ノ關係今マ猶ホ存續シ、爾來大ナル變化ノ茲ニ生ジタルモノアラサレバナリ。

然レドモ、更ラニ翻リテ考フレバ、十九世紀ノ終リヨリ二十世紀ノ始メニ誇ガリテ世界ノ交通機關ニ急激ナル膨脹ヲ來タセリ、電話ノ架設セラレシハ實ニ此際ニ於テシ中ニハ頗ル長距離間ノ架設ヲサヘ見タリ、例之バ「紐育トシカゴ」ノ間ニ架設サレタル電話ノ如キ其一ニシテ無線電信ノ發明サレタルモ亦此際ニ於テス、加之遠距離ニ達スル鐵道ノ敷設サレタル亦多ク此際ニ於テセリ、其就中大ナルモノ二三ヲ列舉スレバ、往キニ露人ノ中央亞細亞ニ遠距離ノ鐵道ヲ敷設セル、是レ一ナリ、此鐵道ハ漸々ニ延長セラレ今ヤ既ニ「バミール」高原ノ附近「アンデジアン」マデ達セルガ、更ラニ延長シテ支那方面ニマデ達セシムルノ計畫アルハ疑ナキ所西比利亞貫

通鐵道ノ成リ、東清鐵道ノ成リタル、又皆ナ其ノ一、是等ノ鐵道成リシニ因リ從來世人ノ曠漠無人ノ原野トシテ棄テ、願ミザリシ處モ以テ自由ニ往來通過スルヲ得安全ニ貨物ヲ輸送スルコトヲ得、東亞ト西歐トヲ聯結スベキ最捷徑實ニ此ニアリトイハル、其他、亞細亞土耳其ニモ鐵道既ニ敷設セラレ、近頃獨人ノ之ニ關係シテ更ニ大ニ延長スルノ計畫ヲ爲スアリ、「バグダット」ヲ通過シテ波斯灣頭ノ「コーワイト」ニマデ達セシメントセリ、阿非利加ニハ既ニ縱貫鐵道敷設ノ計畫成リテ、今マ現ニ工事ニ着手シ其幾分ヲ竣工セルニ加ヘ或ル者ハ更ラニ阿非利加橫貫鐵道ヲ敷設スルノ計畫ヲ成セリ、且ツ支那ノ如キ、保守ノ國柄ナルニ拘ハラズ、天津北京間ノ鐵道及天津牛莊間ノ鐵道ハ早ク既ニ架設セラレ、北京漢口間ノ鐵道ハ昨年既ニ貫通シ此勢ニテ進マバ支那ニ於テモ幾何年ノ後ニハ宛ガラ蜘蛛網ノ如クニ鐵道ノ國內ヲ縱橫貫通スルヲ見ルナラント推察セラル、又世界ノ航路ニ就テ言ヘバ、南北亞米利加ヲ開鑿シテ大運河ヲ通ズル計畫ハ十九世紀ノ中頃ヨリシテ經始セラル、所ナレドモ其愈々成ラントスルハ同ジク二十世紀ノ初メニアリトス若シ此ノ大運河ニシテ竣工スルナラバ其ノ世界ノ貿易ニ一大影響ヲ及バサンコト之レヲ今

日ニ豫測スルニ難カラズ、由是觀之、世界ノ交通機關ガカク急激ニ膨脹ヲ致セル結果世界各國ノ人民ノ狀態亦タ隨フテ急激ニ變更スルヤ必スベク此ノ點ヨリ觀察スレバ、十九世紀以前ハ寧ロ中古ニ屬スル者トシテ支障ナカルベク、今世紀ノ近ク二十世紀ニ起原スルヲ謂フモ亦タ支障ナカルベキナリ。

此ノ見地ヨリシテ論ズレバ十九世紀ノ初メニ方リ歐洲ニ雄飛セル奈破崙ノ如キ之ヲ中古時代ノ人物ト謂ハザルベカラズ、奈破崙ノ世ニ在ル、勿論電氣燈ヲ見ルコトモ無ケレバ、又タ瓦斯燈ヲ見シコトモ無ク、石油ヲ用ユル「ランプ」サヘ當時ハ猶ホ未ダ一般ニ用ヒラレザリシトイフ、將タ鐵道ノ便利ナルニ乘リシコトモ無ク一通ノ電報スラ之ヲ發シ若クハ受取リタルコトナク、是レ奈破崙ヲ以テ中古時代ノ人物ト見ルモ支障ナキヲ謂フ所以ナリ、豈管ニ奈破崙ノミナラン、余ノ眼ヨリ觀レバ彼ノ「ビスマルク」スラ之ヲ中古時代ノ人物トイフモ不可ナラズ、由來彼レ英傑ノ資能ク獨逸聯邦ヲ統一シテ一時歐洲ノ霸權ヲ雙手ニ掌握セシト雖モ其胸裏ニ蘊メル所ハ依然タル古風ノ考ヘナリキ故ニ、近世風ノ考ヲ懷ケル獨逸今帝ノ即位サルルニ及ビ、端ナク意見ノ衝突ヲ來タシ、或ル點ニ於テハ寧ロ敗北セリトイフモ誣キ

ズ例ヘバ「ビスマルク」ニハ小亞細亞ニ獨逸ノ權力ヲ樹立セントノ考ヘナカリシニ似タルモ、面カモ獨逸今帝ハ斷乎トシテ之ヲ樹立センコトヲ企畫シ。今ヤ漸次成功ノ途ニ就キツ、アリ、以テ「ビスマルク」ノ是ニ於テ獨逸今帝ニ一着ヲ輸シタルヲ彰見スベシ而シテ余ノ如キモ實ハ中古時代ニ生レ、今世ニ誇ガリテ生息シツ、アルモノ須臾ノ際ダモ今世ノ今マ正サニ始マリツ、アルヲ念頭ニ置クヲ忘ルベカラズトス。

試ミニ今世ニ於ケル著シキ現象ヲ舉グレバ、萬般ノ事物ガ其ノ規模益々大ト爲リツ、アルコト是ナリ、例シテ之ヲ言ヘバ、政治家ノ政治ヲ爲スニモ、單ニ自國ノ人民ヲ治ムルノミヲ以テ自己ノ目的トセズ、所謂帝國主義ヲ實行スルニ汲々トシ、數千萬里ヲ隔ツル異域ノ人民ニマデ統治ノ權ヲ及バサンコトヲカメヌ、而シテ是レ全ク交通機關ノ著ルシク發達セル結果ニシテ、其ノ國土ノ面積ニシテ狹小ナル、以テ強國ト伍シテ駢ビ馳スルノ難キニ因ル、獨リ各國ノ政治家ノミ然ルニ非ズ、カノ商業ヲ營メル者ニアリテモ亦然リ、米人ノ如キハ大ナル「トラスト」ヲ作り、衆力ヲ合シテ以テ絶大ナル事業ヲ營ミ、其規模ノ大ナル眞個ニ前人ノ夢想ダモセザリシモノ

多シ。從來ハ一人一家獨立シテ商業ヲ營ムコト常ナリシモ、カ、ル時代ハ今ヤ既ニ過ギ去リ、尋常一般ノ會社ヲ創立シテ商業ニ從事セントスル者ニアリテサヘ、猶ホ或ハ時勢ニ後クレタリト爲シ之ヲ償フノ手段トシテ甚大ナル「トラスト」ヲ作り以テ只管テ事業ノ成功ヲ計リス、現ニ大西洋ニハ米人ノ手ニ依ル「瀛船ノ「トラスト」成リテ盛ンニ航海ノ業ヲ營ミ、今マ又タ米ノ國內ニ於テ新タニ穀物ノ「トラスト」ヲ作スノ計畫アルヲ耳ニス。念フニ瀛船ノ「トラスト」ヤ、穀物ノ「トラスト」ヤ、兩ガラ米國ノ近隣ニ位スル我ガ日本人ニ取リテ油斷シ難キ大事業タリトセザルヲ得ス、特ニ歐洲ノ商人ヲ以テシテ、猶ホ且ツ單特ニテハ米人ト顔顔スルコト能ハスト爲シ、益々相聯合シテ以テ之レニ牴ラントスルノ狀アルヲ見ルヲヤ。更ニ團體ノ上ニ徴スルニ、一國內ニ於ル貧民ノ不平ヲ訴ヘントスルニ就キテモ、其ノ爲ス所ハ單ニ國內ノ事物ニノミ止マルトイフニ非ス、廣ク國外ノ同志者ト互ニ氣脈ヲ通ジ、相應ジテ以テ一致ノ運動ヲ爲ス、タトヘバ獨米諸國ノ社會黨ノ如シ、其ノ互ニ氣脈ヲ通ジツ、アルハ、誰レ人モ知ル所カ、ルハ交通機關ノ未ダ發達セザル際ニアリテハ洵ニ困難ノ事業ニ屬セシモ、世界ノ交通機關發達セル今日ノ如キ時代ニアリテハ寧ろ極



メテ易ク、爾來此ノ機關ノ更ニ一層發達スルニ隨フテ彼ガ如キ黨派ニ屬スル人々ノ氣焰益々高マルベキモ亦タ推測スルニ難カラサルナリ。

前文陳ブル所ノ如ク、今ヤ世界萬般ノ事物總シテ大規模ト爲ル時代ナル以上、我日本人民モ亦タ何事ヲ爲スニモ其ノ規模ヲ大ニスルニ罷ムベキハ固ヨリ言ヲ待タサル所タルベシ、而シテ其事業ノ規模ヲ大ニセントスル、單ニ日本國內ノ事物ニノミ注目スルハ不可、必ス廣ク世界ノ事物ニ着目スルヲ要ス。果シテ然ラバ我ガ日本ノ青年ハ成ルベク丈ケ機會ヲ利用シテ海外ニ出遊シ、以テ種々ノ事物ヲ觀察スベシ、是レ今ノ青年ノ宜シク罷ムベキ所ナリ、我ガ日本ノ青年ニ向フテ歐米諸國ニ旅行センコトヲ希望スルハ勿論ナルモ、就中望マシキハ支那朝鮮若クハ西比利亞ニ出遊スルノ多カラント是ナリ。歐米ニ旅行スルハ行途長遠ナレバ、隨フテ多クノ日月ヲ要スレドモ東洋諸國ニ旅行スルハカク多クノ日月ヲ要セズ、一月二月ノ少日子、猶ホ以テ充分ノ觀察ヲ遂グルニ足ル、是レ故ニ在學セル青年ノ暑中休暇ニ際シテ箱根ノ山中ニ起臥スルヨリハ寧ロ進ミテ浦鹽斯德ニ避暑的旅行ヲ試ムルヲ可トス、敦賀ヨリ發船シテ浦鹽斯德ニ行ク、唯々僅ニ二晝夜ヲ要スルノミ、九州ヨリ

朝鮮ニ行キ、支那ニ行キ、若クハ旅順、大連ニ行ク、亦タ單ニ數日ヲ費セバ足ル、奮起シテカ、ル外地ニ趣キ以テ其地ノ事情ヲ觀察スル者、續々接踵センコトコソ望マシケレ。而シテ若シ大陸ニ出遊シテ觀察スル所アラントスル、即チ東清鐵道アリ、萬里ノ長城アリ、此等ハ唯ダ一覽スルノミニテ尙ホ心身ヲ壯大ナラシムルノ効アルベシ、況ンヤ其以外ニ於テ觀ル所ノモノ必ズ少カラザルベク、依リテ得ル所アル亦タ必ズ多カルベシ、敢テ世ノ青年諸子ニ向ツテ海外旅行ヲ勸ムルコト爾カリ。

## 六十四 埃及ノ回教大學(明治三十九年三月六日)

(日本法政新誌所載)

埃及ノ首府「カイロ」ニ、「マホメット」教ノ大學ガアリマス。ソノ名稱ハ、「エルアザール」(El-Azhar)トイッテ居ル。コノ大學ハ、亞刺比亞文學ノ中心トモイフベク、特ニ「マホメット」教徒ニトツテハ餘程主要ナモノデアルカラ、茲ニソノ狀況ノ大畧ヲ紹介シマセウ。

マヅソノ職員ノ方カラ述べマスナラバ、「エルアザール」ノ長ヲ、「セーク、エルアザール」

(Sheik El-Azhar)ト稱ヘテ居ル。コレハ德行ニ於テモ學識ニ於テモ、衆人ニ秀デタルモノデアツテ、其地位ハ「マホメット」教徒ノ眼ヨリ見レバ甚ダ尊イモノデアアル。コノ「セーク」エルアザール」ノ地位ト、埃及王ノ地位トヲ比較シタナラバ、埃及王ノ方ガ無論尊イニハ相違ナイガ「セーク」エルアザール」ノ地位ハ、コレヨリ甚シク下デナイトイフコトダ、ソノ部下ニハ、二百二十五人許リノ教師ガ居ル、サウシテ是等ノ教師ハ、高イ俸給ヲ受取ルモノデハナクテ大抵ノモノハ、一週間ニ七百塊ノ「パン」ヲ貰フノミデアアル。固ヨリ一人デ、此ノ如キ多クノ「パン」ヲ食フ譯ニイカヌカラ、自分デ消費スル以外ノモノハ市中ニ賣出スノデアアル。又同大學ノ教師ハ、校内ニ於ケル授業ノ外ニ、一私人ノ家ノ招ギニ應ジテ經典ノ講義ヲナシ或ハ經ヲモ讀ムノデアアル。日本デハ、葬式ソノ他ノ佛事デナケレバ、僧侶ガ經ヲ讀ムコトハ少ナイガ埃及ニ於テハ、婚姻ノ時ナドニモ經ヲ讀ムノデアアル。ソノ外、コノ大學ノ教師ハ人ノ依頼ニ應ジ書籍ノ謄寫ナドシテ若干ノ收入ヲ計ツテ居ル。且又學生中ノ富豪ナル人ハ、自分ノ尊崇スル教師ニ對シテ、少ナカラヌ贈物ヲスルトイフコトモアル。

「エルアザール」大學ニハ、一萬許リノ學生ガ居ル、コレハ大イナル數トイハネバナラヌ。歐羅巴ノ大學中デ、學生ノ最モ多イノハ佛蘭西ノ巴里大學デアアル。同大學ニハ、學生ガ一萬餘モ居ルトイフコトダ、コノ巴里大學ニ亞グノハ、獨逸ノ伯林大學デアツテ今日デハ學生ノ數ガマツ八九千モアルト思ハレル。ソノ次ハ恐ラク奧地利ノ維也納大學デ、學生ハ五六千程モ居ル。我東京帝國大學ノ學生ハ、數年前ヨリウント増加シテ、法科ノミデモ千五百以上ニ達シ、ソノ他ノ諸分科大學ヲ合スルトキハ、四千五百バカリ居ル。コノ數ト埃及ノ「エルアザール」大學ノ學生數トヲ比較シタナラバ「エルアザール」ノ方ハザツト二倍ノ數デアツテ、巴里大學及ビ伯林大學ト拮抗スル有様デアアル。ケレドモ「エルアザール」大學ノ學生ハ、悉ク高尚ナル教育ヲ受ケテ居ルモノバカリデハナイ。多クノ學生中ニハ、白髮頭デ齒ノ脱ケタ老翁モ居レバ、僅々四五歳ノ小兒モ居ルノデアアル。同大學ニハ、一定ノ在學年限トイフモノハナイノデアアルカラ、隨ツテ此ノ如キ狀況ヲ呈スルノデアアル。ケレドモ大抵ノ學生ハ、三年乃至六年在學スルトイフコトダ。

學生ノ授業料ニハ、一定ノ額ガナイノデ、銘々思ヒ々々ノ金額ヲ寄附スルノデアアルツシテ授業料ヲ必ズ拂ハネバナラヌトイフノデハナイ。

「エルアザール」大學ノ學生ニハ、兵役免除ノ特典ガアルカラ、徵兵忌避ノ爲メニ同大學ニ入ツテ居ルモノモ澤山アル。コノ點ハ、東西一轍トイフテモ可ナリカシラン。同大學ニハ埃及ノ學生ノミナラズ、處々ノ回教國カラ留學生モ來テ居ツテ、校内ニ寄宿スルモノモ澤山アルカラ、ソノ寄宿ノ状態ニ付テ一言シマセウ。同大學ノ寄宿所ハ、廊下ノ如キトコロヲ多クノ部分ニ仕切ツテ、處々カラノ留學生ヲ各別ニ收容シテアル。例ヘバ「アルゼリヤ」ノ學生ハ「アルゼリヤ」部ニ「モロッコ」ノ學生ハ「モロッコ」部ニ各々一部分ニ割據シ、又印度「スビヤ」トルコ等ノ學生モ、廊下ヲ仕切ツテ各々其部ニ割據シテ居ルノデアル。「アラビヤ」ノ「メッカ」市ハ「マホメット」ノ故郷デアアルカラ、其處カラモ埃及ノ同大學ニ留學スルモノガ澤山アル。寄宿生ノ數ハ、各部ヲ通ジテマヅ一千餘名バカリアル。ソノ食事ハ至ツテ質素ナモノデアツテ、豆ノ「ソップ」「パン」ノ片ナドニ「ナツメ」位ノモノデアアル。此等ノ學生ハ、羊ノ皮ノ上ニ坐シテ書籍ヲ讀ミ、倦ムトキハ忽チ横臥シテ中ニハ眠ツテ居ルモノモアル。ソシテ教師デモ學生デモ其處ヲ通過スルモノハ、成ルベク眠リヲ妨ゲヌヤウニツトメテ居ル。

多クノ學生中ニハ固ヨリ貴賤貧富ノ懸隔モアルノデスガ、學校デハ此等ノ間ニ區

別ヲ爲サヌノデアアルソレ故美麗ナル衣服ヲ着ケテ居ルモノガアルカト思フト、粗末ナル着物ヲ纏フテ居ルモノモアル。中ニハ又「メッカ」市ニ巡禮ニ出掛ケテ來テ、ソノ服装ノマ、デ學生中ニ雜ツテ居ルモノモアルトノコトダ。

同大學ノ學生ガ「カイロ」市中ニ於テ何カ惡事ヲ爲ストキハ、同市ノ警察官ハコレヲ捕ヘテ「エルアザール」大學ニ引渡ス、サウスルト、同大學ニ於テハ相當ノ處分ヲスルノデアアル、即チ「エルアザール」大學ハ、學生ノ處罰ニ付テ、特權ヲ有シテ居ル、

「エルアザール」大學ニ於テ教授スルトコロノ科目ノ重ナルモノハ「マホメット」教ノ經典「コーラン」(Koran)デアアル、ソレデ外國カラ同大學ニ遊學スルモノハ、マヅ亞刺比亞語ヲ研究シ、然ル後該經典ヲ學ブノデアアル、經典以外ニ同大學ノ學生ハ「マホメット」教ノ法律ヲ研究シ又文學哲學論理學等モ學ンデ居ル、ソノ教授ノ方法ハマコトニ舊式デアツテ、小兒ハシキリニ經典ヲ暗誦スルノデアアル、維新以前ニ日本ノ學生ガ、四書五經ナドヲ素讀シタルト、又支那ノ學生ガ、背書ト稱シテ折角四書五經ヲ暗誦スルノト同様ニ、小兒ハツトメテ「コーラン」ヲ暗誦スル、同大學ノ教師ハ、無論「コーラン」ニ通曉シテ居ルカラ、如何ナル所ヲ指サレテモ、經典ヲ見ズシテ直ニ教授スルコト

ガ出來ルノデアアル、

「エルアザール」大學ノ學生ハ朝太陽ガ昇ルレバ直ニ起キ、食事ヲ濟マシテ學ニ就ク、ソシテ全ク授業ノ終ルノハ晝頃デアアル、ソノ授業ノ有様モマコトニ奇妙デ、教師ノ講義ノ爲メニ別段室ヲ設ケルデハナイ、同大學ハ宏大ナル建物デアツテ、屋内各處ニ多クノ楹ガアル、教師ハ各々ソノ楹ノ傍ニ、羊ノ皮ヲ敷イテコレニ坐シ、ソノ擔任ノ講義ヲ始メルノデアアル、サウスルト、數多ノ學生ハ周圍ニ集ツテ講義ヲ聽ク講義ヲ終レバ學生ハ教師ノ手ヲ接吻シテ、マタ他ノ楹ノ傍ニ坐シテ居ル教師ノトコロニ行ク、故ニ一ツノ楹ハ一ツノ教師ノ講座ノヤウニナツテ居ルノデアアル、同大學ニハ猫ハ澤山居ルケレドモ、犬ハ一疋モ居ナイノデアアル、「マホメット」教デハ犬ヲ不潔ノ動物トシテ嫌ツテ居ル、ソシテ此處ニ一ツノ不思議ナノハ、コノ宏大ナル建物ノ内、屋根ノナイ處デモ、荷クモ鳥ト名ノツクモノハ決シテ入ラヌトイフコトデアアル、雀ノ如キ何處ニデモ入ツテ來ルヤウナ鳥デサヘ、「エルアザール」大學内ニハ入ラヌトイフコトダ、コレハ如何ナル譯デアラウ、

## 六十五、戦争ヨリ生ジタル海外同胞ノ慘

狀(明治三十九年三月二十七日報知新聞所載)

東洋ノ平和一たび破レ日本ノ名聲隆々トシテ天ニ冲セシモ悲愴慘憺ノ事實之ニ伴フモノ一ニシテ足ラズ數万ノ勇士忽チニシテ屍ヲ戰場ニ横ヘ在郷ノ父兄妻子ヲシテ天ヲ仰ギ心ヲ椎シテ嗚咽流涕セシメシ如キハ造次ニモ轉滯ニモ吾人ノ忘ル、能ハザル所然ルニ慘憺ノ狀貌未ダ此ノ如キ極端ニ至ラザルガ爲メニ夙トニ世人ノ爲メニ忘却セラレ反テ之ガ爲メニ識者ノ同情ヲ買ヒタルモノハ滿洲西比利亞等ニ在留セシ同胞數千人ノ慘狀是ナリ、是等同胞滿洲西比利亞ニ在ルニ當テハ汝々汲々トシテ奮勵努力シ財ヲ蓄ヘ産ヲ積ミシモノ甚ダ少カラズ浦鹽ノ杉浦徳永二氏及尼古來斯克ノ島田氏ハ其最モ著シキ者而シテ其資産此ノ三氏ニ如カズトスルモ二十餘年間即チ人生ノ一半ヲ此異域ニ費ヤシタル者決シテ尠少ニ非ザルナリ加之此等地方ニ散在セシ同胞ノ數

ヲ合スレバ戦争ノ起ラントシタル當時ニハ實ニ七千二百四十二人ノ多キニ達シタリト云フ

戦争ニ先ツコト一兩月は等同胞心中悔々トシテ其生ヲ安ゼズ此ニ於テ貿易事務官川上俊彦氏等上長官ノ命ヲ蒙リ再三諭告ヲ發シ流言蜚語ニ信ヲ置クコト勿レ輕躁ノ舉動ニ出ヅルコト勿レ等ノ言ヲ爲シタレバ居留民モ亦大ニ其言ニ信賴スルニ至リタリト云フ然ルニ是等官憲ノ筆墨未ダ乾カザルニ雷霆霹靂仁川ニ轟キ腥風腥雨旅順ニ霰シ之ト相前後シテ滿洲西北利亞ノ同胞ハ積年ノ經營ヲ一抛シテ倉皇歸路ニ就キ辛苦ノ結果タル資産ハ擧ゲテ之ヲ醜敵ノ奪掠ニ委シ恨ヲ吞ンデ戦勝ノ新聞號外至ルヲ待チタリ吾人其慘憺ノ狀貌ヲ聞ク毎ニ未ダ嘗テ悽然恹然タラズンバアラザルナリ

聞ク所ニヨレバ此ノ如キ損害ヲ受ケタルノ諸氏ハ帝國議會ニ哀願書ヲ提出シ以テ救濟ノ途ヲ講ゼンコトヲ乞タリト云フ余ハ切ニ其哀願ノ聽カレンコトヲ希望スルモノナリ言フコト勿レ是ノ如キ哀願ハ取ルニ足ラズト償金ハ戰勝國ノ當然ニ得可キ者若シ之ヲ得ルトスレバ損害ヲ受ケタルノ箇人モ亦賠償ヲ受クルノ權

利アリ爰キニ北清騷動ノ起リタル時列強ノ臣民若干ノ損害ヲ蒙リ其結果トシテ清國政府ハ賠償ノ義務ヲ負擔セシコトハ衆人ノ知ル所然ルニ日露戰爭終リヲ告ゲテ滿洲西北利亞ニ在留セシ同胞ノ損害ハ今ヤ將サニ在朝在野ノ政治家ノ爲メニ忘却セラレントス是吾人ノ頗ル遺憾トスル所ナリ

日本ノ運命ヲトスルニ他日覇ヲ世界ニ稱ス可キ者方今ノ英俊其準備ニ着手セザル可ラズ然ラバ則チ其第一着手トシテハ右等不幸ノ同胞ニ對シ飽マデモ同情ヲ表シ其受ケタル損害ニ對シ充分ノ救濟ヲ爲サル可ラズ若シ是等諸氏ノ損害ヲ棄テ願ミザルトキハ是即チ日本勢力ノ海外發展ヲ杜絶スルニ齊シ忘ル、コト勿レ是等諸氏ハ海外發展ノ前驅者ナリ盛ニ之ニ對シ同情ヲ表セ其受ケタル損害ニ對シ充分ノ救濟ヲ爲セ是獨リ余ノ希望ノミニ非ズ後世子孫必ズ之ヲ悦バン

(明治三十九年三月二十四日之ヲ記ス)

## 六十六、戰後ノ教育

(明治三十九年四月一日報知新聞所載)

日露戦争ハ古今未會有ノ事件ニシテ神功皇后ノ三韓親征モ豊太閤ノ朝鮮征討モ是レニ比スルニ足ラズ、加之世界萬國ノ歴史ヲ緝クモ彼ノ遼陽役奉天戦ノ如キ大戰闘ハ未ダ曾テ類例ヲ見ザル所ナリ幸ヒニシテ我が軍捷ヲ奏シ今ヤ戦後經營ヲ策ス可キ時機ニ到達セリ

戦後經營ノ富國強兵ヲ主眼トス可キハ固ヨリ言フヲ俟タズト雖モ爾カモ世上種々ノ議ヲ試ムルモノアリ、即チ曰ク日本政府ハ大ニ實業ヲ獎勵セザル可ラズト、又曰ク忠君愛國ノ思想ハ今後或ハ減衰スルノ虞レアルヲ以テ大ニ是ヲ養成セザル可ラズト、或ハ海外殖民ヲ獎勵セザル可ラズ、又ハ今後ノ社會ニ貧富懸絶ノ惧アルヲ以テ、富國強兵ノ實ヲ舉グルニ困難ナリト、其所説紛々雜然タリト雖モ、概シテ論旨ノ味フ可キモノ多キヲ認ムルナリ

併シナガラ戦後經營ノ最タルモノハ、教育制度ヲ刷新シ、大ニ我が國民ヲ教養スルニアリト信ズ、即チ教育ノ方法宜シキヲ失スレバ、實業モ隆盛ナル能ハズ、殖民モ成効スルニ由ナク、忠君愛國ノ觀念得テ期ス可ラズ極言スレバ社會貧富ノ不平均ヲ豫防スルノ途モ又教育ノ力ニ待タザル可ラザルナリ

然ラバ今後最モ重キヲ置カザル可ラザルモノハ、教育其物ニアリ、制度、機關ノ整備人物ノ選任ハ殊ニ慎重ヲ要ス可キモノナルニ係ラズ、近今ノ政治家動モスレバ教育ヲ度外視シ文部大臣ノ如キハ、伴食ノ列ニ委シテ顧ミズ、是レ頗ル過レル政策ト謂ハザル可ラズ、凡ソ東洋ニ邦ヲ爲ス所ノモノ多シト雖モ悉ク萎靡シテ振ハザルハ何ノ故ゾ、我國運ノ獨リ隆々トシテ旭日冲天ノ勢アルハ何ニ原因スルモノゾ、是レ夙ニ我が國ガ歐米ノ文物ヲ採用シテ教育ノ基礎ヲ新タニシ、陸海軍ノ制度ヲ改メタルニ起因セルモノナリ

今回露國ト戦フテ勝チタル所以ノモノ、實ニ如上ノ事實ニ淵源セルナリ、教育ノ重シゼザル可ラザルコト、夫レ實ニ斯クノ如シ開クガ如クンバ、西園寺侯ガ内閣ヲ組織スルニ當リテ、最モ教育ヲ振興スルニ意アリシト云フ、侯ガ事毎ニ前内閣ノ遺策ヲ踏襲シテ、政界ノ惡風ヲ助長シタル如キ感アルハ吾輩ノ以テ遺憾トスル所ナリト雖モ果シテ教育振興ノ意アリトセバ、吾人此點ニ關シテ、贊同ノ意ヲ表セザル可ラザルナリ

牧野公使ガ文部大臣ニ就任セシハ、一方ニ於テハ、西園寺侯ノ知遇ニ感シタルモノ

ナル可シト雖モ、他ノ一面ニ於テハ、我が國民教育ニ對シ、深甚ナル大抱負ヲ實行セ  
ント欲スルノ意ナル可シ、是レ吾人ノ欣幸スル所ニシテ、先ヅ其施治ノ如何ヲ見テ  
以テ徐ロニ吾人ノ所見ヲ陳述セント欲ス

## 六十七、學習院ノ改革(明治三十九年四月六日報知新聞所載)

學習院ニテハ大學科ヲ廢シ高等科ヲ廢シテ、中學科ト小學科ノミヲ保存スルコト  
、ナレリ、然ルニ此改革ノ數ヶ月ナラザルニ既ニ早クモ後悔ヲ爲ス可キ、前兆ノ現  
ハレシトシツ、アルアリ、殊ニ中學科ノ卒業生ハ最近ニ續出スベキ筈ナルガ、是等  
卒業生ハ卒業後ニ於テ如何ナル方針ヲ採ラント欲スルヤ、或ル一部分ハ海陸軍ノ  
士官タラント欲スルモノアル可ク、又ハ進ンデ帝國大學或ハ是レト類似ノ學校ニ  
入ラント欲スルモノナルコト明ラカナリトス  
而シテ帝國大學ニ入ラント欲セバ、先ヅ高等學校ニ入ラザル可ラズ、高等學校ニ入  
ラントシテ困難ヲ感ズル所ノ問題ハ、試験ニ合格スルノ一事ナリ、然カモ幾千万ヲ

以テ數フル、士族平民ノ子弟ト競争シ、果シテ之ニ打ち勝ツ可キヤ否ヤハ、最モ懸念  
ニ堪エザル所ナリ、若シ不幸ニシテ勝チヲ得ザリセバ、更ラニ劣等ナル學校ニ彷徨  
スルコト、ナリ、從ツテ高等教育ヲ受クルニ、不便ヲ感ズル結果、必ズヤ歐洲ニ留學  
センコトヲ望ムナル可シ、併シナガラ爵位相當ノ品格資金ヲ備ヘテ、希望ノ道程ニ  
赴キ得ルモノ、現今ノ華族中決シテ多カラザルヲ信ズ、公侯爵ノ子弟ハ其資産ノ豊  
富ナルコト疑ヒヲ容レズト雖、伯爵以下ニ在リテハ必ズシモ富裕ナリト謂フ可ラ  
ズ、中ニハ巨萬ノ富ヲ積ムモノアルモ是レ例外ナリ、余ハ固ヨリ日本ノ貴族ヲ辱シ  
メント欲スルモノニアラズ併シナガラ事實ハ事實トシテ述ベザル可ラズ、然ラバ  
即チ學習院ノ中學科ヲ卒業シテ而シテ其方嚮ニ迷惑ヲ感ズルモノ、伯子男ノ子弟  
ニ最モ多カル可キヲ信ズル也、是等ハ依然トシテ學習院ニ高等科及ビ大學科ヲ存  
置セシナラバ、大ニ便益ヲ感ズルコト論ヲ俟タザル所ナリシニ、曩キニ之ヲ廢スル  
ニ至リシハ何ニ原因スルカ、若シ學習院ノ經費多キニ過ルガ爲メ、之ヲ廢シタリト  
謂フモノアラバ、余ハ我が貴族ノ爲メニ之ヲ恥ヅルナリ、學習院ノ經費如何ニ多額  
ナリト雖モ、我が國ノ貴族ガ、自家ノ資産ニ相當ノ金額ヲ醸出シテ、其維持ヲ圖ルハ

左シテ困難ニアラズ、曾テ貴族諸子ノ醸出シタル金額ハ、約四十万圓ナリシト記憶セルガ更ラニ多少ノ醸金ヲ敢テセバ、高等科及ビ大學科ヲ維持スルコト、決シテ困難ニアラザルナリ、余ハ華族諸子ガ切ニ此舉ニ出デラレンコトヲ望ムナリ、余ガ學習院ノ改革ニ對シテ、評論ヲ加フルハ、僭越ノ嫌ヒナキニアラザルモ、華族諸子ノ隆替ハ、我が國ノ盛衰ニ關係スル所、頗ル大ナルガ故ニ、國家ノ爲メ敢テ一言ヲ呈スル次第ナリ

## 六十八、滿洲經營ノ方針(明治三十九年五月二日)

突然ノ申込ダカラ纏マツタ事モ云ハレヌガ、平素考ヘテ居ルコトヲ大體御話シヤウ、元來一口ニ

滿洲經營ト謂ツテモ、吉林省モアレバ、黑龍省モアルノデ、滿洲全體トシテノ經營ニ對スル自分ノ考ハ、戰前ト少シモ變リハ無イ、無論露國ノ勢力ヲ滿洲以外ニ驅逐スルニアルノデ、南滿洲ハ勿論、北滿洲ヲモ是非日本ノ領有トセナケレバナラス、乍

併斯クノ如キハ今日之ヲ詳論スルノ機會ニモ非ズ、又外交上差支ヲ生ズ、個所ガ無イトモ限ラヌカラ、今ハ唯南滿洲ノ經營丈ニ就テ述ベヤウ、

南滿洲モ前言フ通り將來ハ是非日本ノ領有トスベキデアルガ、今日ニ於テハ條約ガ締結セラレテ居ルカラ、其條約ノ範圍内ニ於テ經營センケレバナラスノデ、頗ル不自由デアルガ、又已ムヲ得ナイコトデアアル、自分ノ意見ハ日本今日ノ經營策トシテハ、戰前ニ於ケル露國ノ經營ト同ジ政策ヲ取ルベキダト思フ、夫ノ戰々競々トシテ列國ノ態度ヲ左顧右眎スルガ如キハ素ヨリ大反對デアアル、出來得ベクンバ今日ニ於テモ南滿洲ハ日本領タリト云フ考デ、万般ノ施設ヲ斷行シテ贊ヒタイ、由來日本ノ外交ハ通辯的外交幫間的外交デアアルガ、斯クノ如キヲ以テ日本將來ノ大發展ヲ期セントスル、迂愚モ亦甚シイデハ無イ歟、今日尙迎合主義ノ外交ニ甘ンズルノ勢デハ、滿洲土着ノ清國人ヲ制馭スルコトスラ六ヶシイト思フ、依テ吾人ガ經營ノ第一方針ハ容赦無クドシ、行ルニ在リト信ズル、

軍隊ハ條約ノ範圍内ニ於テ可成多數ノ駐屯兵ヲ置ク必要ガアル、否出來得ベクンバ條約面ヲ越エテモ、國勢扶植ノ態度ニ出デ、可也ト思フガ、此勇氣ハ迎モ政府



ニ無カラウト思フ、

居留地民政 滿洲到ル處ニ日本人ノ居留地ヲ設ケザル可ラザル次第ナルガ其民政ニ就テ別ニ滿洲政府ヲ置ク可キヤ、又ハ朝鮮統監府ヲシテ兼掌セシム可キヤハ問題デアルガ、軍人ヲシテ民政ノ事ヲ司ラシムルハ極メテ困難デアルカラ、是非文官ヲ以テ民政ノ局ニ當ラシメンケレバナラス、何トナレバ軍人ハ概シテ民政ノ長官タルニ適シナイ、勿論例外モ有ラウガ、例外ニ頼ルノハ大ニ危険デアル、乍併文官ヲ以テ民政ノ局ニ當ラシムルトモ、滿洲駐屯軍ノ爲メニ頭ヲ抑ヘラル、様テハ瀋洲ノ腕ヲ揮フ譯ニ行カナイ、從ツテ當局ニ人材ヲ得ルコトガ出來ナイ、有爲ナル文官中焉ゾ好ンデ軍人ノ掣肘ヲ受クルガ如キ地位ニ甘ンズル者アラシヤ之ヲ防グニハ是非韓國統監府ノ如キ有力ナル民政政府ヲ置カンケレバナラヌト思フ、臺灣ノ民政ハ軍人ニ依ツテ統括セラレテ居ルガ、臺灣今日ノ狀況ハ先外敵ガ無イト云フテ宜シイ、故ニ戰略ニハ左マデ重キヲ置クニ及バス、然ルニ滿洲ニハ外敵ニ對シテ最モ強キ戰略ニ長シタ軍人ヲ駐屯軍ノ長トセネバナラス、併此ノ如キ軍人ハ必ズシモ民政ノ何タルヲ解シナイ、隨テ其軍人ノ下ニ立テル民政長官ハ充分ニ其手腕

ヲ振フ事ガ出來ナイ、且ツ滿洲今日ノ事情デハ種々軍事的施設ヲ要スルノ結果、軍人跋扈ノ機會ガ頗ル多イ、夫故ニ今日ノ所滿洲ノ民政ハ韓國統監府ノ所管トシテ鶴原ノ様ナ否寧ロ夫レ以上ノ人物ヲ用キンケレバナラヌト思フ尋常ノ領事ヲシテ民政ニ從事セシメテモ充分ナ事ハ出來ナイ、  
裁判所 斯クノ如ク滿洲居留地民政ヲ統監府ノ管掌トスル以上ハ又獨立ノ日本裁判所ヲ置ク必要ガアルト思フ勿論滿洲ニ於ケル日本人ノミノ訴訟事件ヲ取扱フモノデアルガ、日本人ト清國人トノ訴訟事件ニ就テハ、立合裁判ノ制度ヲ行ヒ、滿洲ニ於ケル裁判權ノ自立ヲ斷行シタラ宜シイト思フ、兎ニ角滿洲ニ於ケル裁判事務ヲ領事裁判丈ニ任スコトハ大ニ不利益ダト思フ、  
警察 滿洲ニ於ケル居留地ノ警察モ之ヲ統監府ニ專屬セシメ、憲兵及ビ巡查ヲ以テ行ハシム可キト思フ、  
保護政策 斯クノ如クニシテ民政廳ト軍隊ト共同ノ上、大ニ日本人ノ保護ニ勉メンケバナラス、現在滿洲ニ入込ンデ居ル日本人ハ多クハ不信用デ、無資産者デアルカラ、到底滿洲ニ大資本ヲ放下スルコトモ出來ナイシ、又支那人カラ資本ヲ借出ス

コトモ出來ナイ、唯徒ラニ彼等ノ輕侮ヲ買フノ有様デアルカラ、軍隊並ニ民政署ハ大ニ保護ノ道ヲ講ジテ、信用アリ資本アル日本人ノ喜ンデ滿洲ニ入込ムコトヲ誘致セナケレバナラス、今日ハ官權主義デ官尊民卑ノ弊ニ驅ラレテ、兎角實業家優待ノ道ヲ缺イテ居ルガ、斯クノ如キハ滿洲ノ經營上一大不得策ヲ來スモノト思フ、若シ政府ニシテ民間實業家ヲ優待シ旅行上ノ便宜ヲ與フルハ勿論、種々取調上ノ注意ヲ與フルニカメタナラバ、地位アル實業家ガ奮フテ滿洲ニ行ク様ニナルデアラフト思フ、元來滿洲ニ於テハ鑛山、豆、麥、其他日本人ノ利用スベキ原料ハ頗ル多イノデ一例ヲ舉グレバ、安東縣ヨリ蓋平ニ跨ル一帶ノ山藪ノ如キ、從來ノ支那製造ニ依レル所謂「ケントン」ハ黃色デ價モ頗ル廉イ、之ヲ日本デ製精シタナラバ頗ル立派ナモノガ出來ル、是ハ實驗ニ基ツク話デ、其他一般ニ價ノ廉イ物産ハ捨テ、土ノ如シク、滿洲ノ貿易ハ日本品ヲ滿洲ニ賣ルコトノミニ非ズ、價安キ物品ヲ日本ニ買ヒ入ル、方ニモ大ニ注意センケレバナラス、其他鑛山伐材等ニ就テモ早クヨリ各地點々々調査シテ、可何日本人ヲシテ占據セシムルノ方針ヲ取ランケレバナラス、

滿洲開放　ドーセ滿洲ハ廣ク世界一般ニ開放センケレバナラス運命ニ在ルノダ

カラ、開放ノ事ハ然ク敢テ急クノ必要ハ無イト思フ、今日別段ノ施設モシナイ内ニ汎ク之ヲ開放スル時ハ滿洲ノ利益ノ大半ハ諸外國人ノ爲メニ奪ハル依テ目下ノ急務ハ可成早ク滿洲各地ノ財源ヲ調査シテ、可成多ク日本人ヲシテ之ヲ占據セシムルニアルト思フ、若シ利源開發等ノ事ニ就テ日本人ト他國人トノ間ニ争デモ起ル様ナコトガアレバ、大ニ國民ヲ保護ス可キデアル、此位ノ度胸ヲ示シテ置クニ非ズンバ、誰モ安心シテ資本ヲ投下シ得ナイ筈デアル、日清戰爭ノ後、條約ニ依ツテ得タル各地ノ專管居留地ニ手ヲ出シタ者ガ少ナカツタト云フノデ、政府ノ官吏ハ日本實業家ヲ惡口シテ居ルガ此罪タルヤ決シテ實業家ノミノ罪デハ無イ、政府ノ保護其モノガ極メテ冷淡デアツタ爲メデアルト思フ、折角資本ヲ投下シテモ支那人トノ間ニ争ヲ生ジタ場合杯ニ、政府ノ保護ハ極メテ不充分デアツタ、今ノ官吏ガ兎角官尊民卑ノ思想ニ驅ラレテ、調査等ノ手傳ヒヲ爲テ遣ラナイノハ、日本商人ガ海外ニ事業ヲ求メザル一大原因ダト思フ、苟クモ力ヲ海外ニ伸バサント欲セム、商人保護ノ政策ハ國家當然ノ義務ニシテ滿洲ノ如キモ此政策ヲ取り來ラバ、日ナラズシテ日本化セシメ得ルト思フ、

鐵道 東清鐵道ノ幹線ハ國有ヲ可トス、勿論民有デモ官有デモ差シテ不都合ハアルマイガ、今日之ヲ民有トスルノハ頗ル困難デアルト思フ、第一將來幾干ノ利益ヲ伴フモノナルヤ否ヤガ判ラナイシ又株式ヲ募ルト云ツテモ、隨分面倒ダト思フ、ケレドモ、是ハ幹線ノ話デ、支線ニ至テハ日清共同ノ資本テ可成早ク完成ス可キデア、若シ政府ノ資本デ支線ヲ敷設スルコトガ出來ルナラバ、夫レデモ宜シイガ、兎ニ角支線ノ敷設ハ滿洲ノ貿易ヲ盛ニシ、物價ヲ大連ニ集中スル點ニ於テ、一日モ忽セニス可カラザルコトデアツテ、幹線丈デハ東清鐵道ノ將來モ言フニ足ラスト思フ

「レール」ノ幅 軌道ハ露國ト同ジ幅、即五呎ニスルカ、又ハ韓國鐵道若クハ新民屯ヨリ北京ニ到ル鐵道ノ如キ通常ノ廣軌、即四呎八吋ノ幅ニスルカハ問題デア、五呎說ハ日露ノ鐵道ヲ聯絡スルノ目的ニアルノデ、大連ヨリ聖彼得堡迄同ジ機關車ヲ走ラセテ結局西比利亞線ノ終局點ヲ大連ニ求メシメント云フノデア、ルガ自分ハ是ハ得策デ無イト思フ、設令今後ニ於テ日露兩國ノ間ガ親密ニナリ得ルト假定スルトモ、斯ノ如キノ希望ハ到底空想タルヲ免レナイト思フ、浦鹽ハ不完全乍ラ西比

利亞線ノ終局點ト爲シ得ルカラ、露國政府ノ人情トシテモ大連ノ如キ他國ノ領有ニ屬スル地點ニ、西比利亞線ノ終局ヲ求メテ、結局利益ノ大部分ヲ他國ニ與フルガ如キハ有リ得カラザルコトデ、假リニ自分ヲ露國ノ官吏タラシムルトモ、斯ル愚策ハ探ラナイト思フ、殊ニ朝鮮鐵道モ四呎八吋デア、ルシ、牛莊ヨリ天津、天津ヨリ北京ニ到ル鐵道モ亦通常ノ廣軌デア、ルカラ、是等鐵道ノ連絡上、同一ノ軌道ヲ用ユルハ非常ノ便利デア、ル、假令露國ト同ジク五呎ノ軌道ヲ用キタ所デ、日露兩國鐵道ノ連絡點ニ於テハ猶多少ノ混雜ハ免レナイノデ、日本鐵道ニ依レル總テノ貨物ヲ稅關無シニ通過セシムルコトハ無イカラ結局四呎八吋ノ普通廣軌ヲ用ユルト擇ブ無キニ至リハセヌカ、且ツ五呎ニスルコトナルト、別ニ澤山ノ設備ヲ要スルカラ、軍事上尠ナカラザル不便ヲモ生ズルコトト思フ、此點ニ於テ自分ハ五呎說ニ反對スルノデア、ル、

支線 是レト共ニ現在安東縣ヨリ奉天ニ通ズル輕便鐵道モ、早ク廣軌ニ更ムルガ宜シイシ、奉天新民屯間ノ輕便鐵道亦然リデア、ル、若シ斯ノ如クセバ安東縣ヨリ北京迄軌道ヲ同ウシ、同ジ貨車列車ヲ用キ得ルカラ、旅行上並ニ開拓上非常ノ便宜ヲ

生ズルノデアアル、又吉林長春間ノ鐵道モ可成早ク經營センケレバナラヌ、吉林ノ地ハ遠近ノ山貨ガ集中スル所ニシテ、今日之ヲ度外スル如キハ以テノ外デアアル、山貨ノ重ナルモノハ麝香、野生人參、金、銀、錫及鹿ノ袋角等、其他分量小ニシテ價貴キ物ガ頗ル多イ、若シ吉林長春間ノ鐵道ガ完成スレバ、此等ノ貨物ハ悉ク營口大連等ニ集中シテ莫大ノ利益ヲ與フルコトト思フ、

大連關稅 日本品ハ總テ無稅トシテ内地ト同一視シテ可ナリト思フ、日本ヨリ輸入スル物品ガ無稅ナレバ、滿洲各地ニ賣捌ク上ニ於テ頗ル便利デアアル、又日本ヘ送ルベキ物品ニ對シ輸出稅ヲ取ラナイトスレバ、日本内地ニ低廉ナル物品ヲ送ルコトガ出來テ、旁々滿洲開拓上非常ノ便宜デアラウト思フ、斯ノ如クナレバ大連ニ數多ノ盛ナル製造所ガ起ル可ク、從ツテ大連ハ東洋貿易ノ中心ノ一ツトナルト思フ、是レ最モ着目ス可キ點デアツテ、今後東洋貿易ガ發達シ英米等ノ大船ガ交通運輸ニ從事スルコトニナルト必ズ碇泊地ヲ大連ニ求メンケレバナラヌト思フ、大連棧橋ハ幅四百呎長七百呎アリテ、吃水二十八呎位ノ船ナラバ充分ニ横付ニシ得ルカラ、此點ニ於テ大ニ屬望シテ可ナリト思フ、但シ大連ニ寄港スル船ハ必ズ神戸横濱

ニモ寄港ス可キデアアルカラ、從テ兩港ノ改築モ大連經營ニ伴フ當然ノ問題デアアル、現ニ神戸築港ガ計畫サレテ居ルガ、開ク處ニ依レバ和田岬ヲ截斷シテ神戸兵庫ノ連絡ヲ通ズルト云フコトデアアルガ、斯クノ如キハ取ルニ足ラザル小經營ト思フ、和田岬ノ如キハ宜シク之ヲ開拓シテ鐵道ヲ敷イタナラバ、直チニ以テ一大棧橋ト化シ得ルデハナイカ、

民間經營 政府ノ經營トシテ大體以上ノ如シト思フガ、民間實業家ニ向ツテモ奮勵一番スルコトヲ望マンケレバナラヌ、今日ハ一私人ノ小資本ヲ以テシテハ駄目デアアルカラ、宜シク充分ナル調査ヲ遂タル上、大會社ヲ設立シテ共同事ニ當ル可キデアアル、幾ラ日本ニ滿洲向キノ物品ガアツテモ、低廉ナル價ヲ以テスルニアラズンバ支那人ノ得意ヲ得ルコトハ出來ナイ、一例ヲ舉グレバ、今滿洲ニ於テハ一抔ノ餛飩ヲ十錢ノ高價ニ賣付クル者アリト云フガ、斯ル風デハ到底駄目デアアル、餛飩ノ一例他ヲ推シテ知ル可シテ、元來安物買ヒノ支那人ニ向ツテハ宜シク大資本ヲ以テ大仕掛ノ事業ヲ營ミ總テ物ヲ安ク製ルコトニ注意ス可キデアアル、膠州灣ニ於テ獨逸人ガ支那人ノ嗜好ニ適スル様ナ極メテ廉ク、且ツ良ク切レル剃刀ヲ造リ、爲メニ

數十萬圓ノ利益ヲ得タトイフコトガアル、是ハ畢竟獨逸人ノ商業ノ規模ガ頗ル大仕掛デアルカラデアアルノデ、斯クノ如キハ日本實業家ノ鑑ミル可キ所デハナイカ」結論 要之政府ハ出來ル丈保護獎勵ニカメ、旅行視察調査經營ニ可成便利ヲ與フ可ク、民間實業家ハ資本ヲ合併シテ可成大規模ノ事業ニ從事スルニ志シ、上下官民相扶ケテ滿洲經營ノ事ニ當ラバ、滿洲經營ノ大業モ敢テ難事ニハ非ル可シト思フ

### 六十九、日本人ハ滿洲ニ於テ何チナスベ

キカ (明治三十九年六月十日實業之日本所載)

#### 一 滿洲經營ノ根本方針

西園寺首相過般私ニ滿洲ヲ踏査シ對滿經營ノ方針ヲ樹立シ、歸來之ヲ元老及閣臣ニ諮リテ成案成レルガ如シ、吾人未ダ其實ヲ審ニスル能ハズト雖モ、此時ニ際シ私見ヲ披キテ世人ノ教ヲ乞フハ必ラズシモ徒爾ニアラザルベシ。

吾人ヲシテ有體ニ希望ヲ發表セシムレバ南滿洲ハ勿論、北滿洲ニ於テモ亦露國ノ勢力ヲ根本的ニ排除シ爰ニ日本の勢力ヲ扶植セントスルニアリ、然レドモ今ヤ條約ノ締結セラル、アリ、縱ニ吾人ノ希望ヲ實行スルヲ許サズ、即チ勢條約規定ノ範圍内ニ於テ經營方針ヲ樹立スルノ外ナシ。

日露戰爭以前ノ南滿洲ノ地ハ名ハ清國主權ノ下ニアリタリト雖モ、實ハ露國勢力ノ統御ノ下ニアリタルモノナリ、戰爭ハ全然滿洲ニアリシ露人ヲ排シ日人ヲシテ之ニ代ラシメ、戰後ノ日本ノ滿洲ニ於ケル地位ハ戰前ノ露國ノソレニ類似シタルモノアリ、故ニ今後南滿洲ノ經營方針トシテ吾人ハ戰前ノ露國ノ經營ト同ジ政策ヲ取ルベキヲ望ム、戰々兢々トシテ列國ノ態度ニ左顧右盼スルガ如キハ素ヨリ事ヲ滿洲ニ成ス所以ニアラザルナリ、寧ロ滿洲一帯ノ地ハ帝國領土ト見做シ帝國及ビ國民ノ利益ノ爲メ、清人ノ安寧幸福ノ爲メ萬般ノ施設ヲ斷行セザルベカラズ。

#### 二、滿洲統治ノ方針

滿洲ニ發展セント欲セバ其第一着手トシテ必要ナル地方ニハ到ル所ニ適當ナル地積ノ居留地ヲ設定スルヲ要ス、是レ邦人發展ノ根本ナレバナリ、之ガ爲メニハ日

本ハ適當ナル地積ヲ優先ニ占領シ、清國當局ニ對シテハ一片ノ通牒ヲ發スレバ足ルベシ、清人ニハ由來威ヲ以テ臨ムベク、恩ヲ以テ懷クベカラズ、若シ恩ヲ以テ接スレバ彼等ハ直ニ狎レテ厭クコトヲ知ラザルコト從來ノ經驗ニ徴シテ明カナリ、故ニ始メニ之ヲ協商スレバコソ故障反對モ百出スレ、自ラ定メ自ラ決シ而シテ之ヲ通牒スレバ事ハ直ニ決ス、露國ガ僅ニ數年ノ間ニ廣漠タル滿洲ニ於テ其勢力ヲ扶植シ得タルモノ實ニ此手段ヲ用キタルニ由ル、吾人ハ我國ガ此點ニ於テ果斷決行ノ勇氣ヲ出スヲ望ム。

居留地ノ設定ト共ニ滿洲民政ノ爲メニ特ニ一ノ滿洲政府ヲ設クベキカ又ハ朝鮮統監府ヲシテ之ヲ兼掌セシムベキカハ一個ノ問題タルベシ、而シテ吾人ハ寧口後者ヲ採ラント欲ス、滿洲ハ名義ニ於テ支那領タルモ北ハ直ニ露國ニ接シ地勢上之ガ守備ノ任ニ當ルモノハ外敵ニ對シ最モ強硬ニ、最モ戰略ニ長シタルモノナラザルベカラズ、而モ武官ハ必ラズシモ行政ニ精カラズ、眞ニ統治ノ實ヲ舉ゲ經營ノ果ヲ收メント欲セバ最モ手腕アル文官ノ手ニ待ツヲ要ス、然レドモ他方ニハ有爲ノ駐屯軍司令官アリ、之ガ下ニ民政官タルモノ敏腕アリト雖ドモ、常ニ之ガ掣肘ヲ受

ケ充分ニ其力ヲ揮フコト能ハズ、即チ軍政及民政ニ於テ均シク有力敏腕ノ人ヲ舉ゲ而シテ圓滑ニ滿洲經營ノ大業ヲ舉ゲント欲セバ必ラズヤ統監府ノ如キ有力ナル民政官ヲ戴カザルベカラズ

滿洲ニ於ケル民政官ノ任務ハ極メテ重シ、或時ハ多大ノ權力ヲ有シ且ツ行ハザルベカラズ從テ其名稱ハ領事タルヲ妨ゲズト雖モ其人物ト從テ之ニ對スル待遇ハ必ラズヤ普通ノ領事以上タラザルベカラズ、事ハ人ヲ以テ成ル尋常ノ領事ヲ派シテ事ヲ爲サントスルハ必ラズ蹉跎ノ端ヲ開クモノナリ、戰前ニ於ケル露國ノ極東經營ハ明ニ之ヲ示スニアラズヤ

裁判事務モ亦之ヲ獨立セシメ、領事裁判ニ托スベカラズ、前論ノ如ク統監府滿洲民政ノ總轄ヲ兼スルトセバ別ニ獨立シタル裁判官ヲ置キ、日本人間ノ訴訟事件ハ總テ之ヲ取扱ヒ、日清人間ノ訴訟事件ハ清官ノ立合裁判ノ制度ヲ用ヒ、滿洲ニ於ケル裁判權ハ之ヲ獨立セシムルヲ要ス。

裁判ノ獨立ト共ニ居留地ノ警察モ亦之レヲ統監府ニ專屬セシメ、憲兵及ビ巡查ヲ以テ之ニ當ラシムベシ。

## 三、滿洲開放ニ對スル帝國ノ位置

滿洲開放ハ帝國ガ世界ニ向テ公約セル所ナリ、帝國ハ何レノ日カ必ラズ之ヲ開放スベキノ運命ヲ荷ヘルモノナリ。從テ開放ハ必ラズシモ之ヲ急ニシテ利益ノ大部分ヲ外人ニ奪ハル、ヲ要セザルナリ。否ナ寧ロ可成早ク滿洲内地ノ利源ヲ調査シ可成早ク日本人ヲシテ占據セシメ以テ日本の勢力ヲ扶植スルコソ目下ノ急務トスル所ナレ。

世上或ハ機會均等主義ヲ口ニシテ滿洲ノ利益ハ列國ノ間ニ公平ニ分ツベシト稱スルモノアリ、然レドモ帝國ノ地位ハ他列國ト均シカラズ、我國民ハ滿洲平和ノ爲メニ幾萬ノ生靈ヲ犠牲ニ供シ、幾十億ノ資金ヲ戰費トシテ費シタリ、即チ人ト財ト廢スルコト獨リ斯ノ如ク多大ナリシ國民ガ其利益ヲ收ムルニ當リテハ之ヲ普ク列國ノ間ニ公平ニ分ツベシト云フハ寧ロ不思議ノ推理ニアラズヤ、日本ハ巡查國ニアラズ、危險ト困難ハ獨リ之ヲ負擔シ收益ハ公平ニ之ヲ列國ニ分ツベシト云フハ難ヲ人ニ責ムルニアラズヤ、受クルモノハ以テ機會均等主義ト云フベシト雖モ、帝國ハ爲メニ却テ大ナル不公平、大ナル損失ヲ招カザルヲ得ズ、是ヲ以テ吾人ハ帝國

及ビ帝國民ガ滿洲ニ於テ優越ノ權利ヲ有シ列國ニ對シ優先ノ利益ヲ占據スルヲ以テ却テ事ノ公平ヲ得タルモノナルヲ信ズ、從テ我政府ノ國民ニ對スル態度ハ自ラ此方針ヲ根柢ニ置クヲ要ス。

## 四、實業家ニ對スル保護

日清戰役ノ後、帝國ハ清國ヲシテ幾多ノ市港ヲ開カレメ、專管居留地ヲ設定シタルモ、我實業家ノ之ニ經營着手スルモノ少ク列國居留地ノ繁華日ニ進ムニ反シ獨リ我居留地ノ雜草芊々タルヲ見、當局者ハ我實業家ノ無能ヲ口ニシタルコトアリキ實業家ノ無能ハ或ハアラン、而モ政府ノ保護ガ極メテ冷淡ナリシコト亦與ツテ力ナクンバアラズ、折角資本ヲ放下スルモ危險ニ際シ政府ノ保護充分ナルヲ得ザレバ事業家ハ安ジテ其經營ニ從フ能ハザルナリ。苟クモ力ヲ海外ニ伸サント欲セバ商人保護ノ政策ハ國家當然ノ義務ニシテ滿洲ノ如キ特ニ切要ナルモノナリ。

現時滿洲ニアル邦人ノ多數ハ信用ナク資産ナク、從テ事業ヲ經營スルノ質資ヲ欠キ徒ニ清人ノ輕侮ヲ買フニ過ギズ、故ニ眞ニ滿洲發展ヲ期スレバ駐屯軍隊及民政署ハ大ニ保護ノ道ヲ講ジテ信用アリ資本アル日本人ノ喜テ滿洲ニ入ルヲ誘致セ

ザルベカラズ近時當局者ハ相當ナル資格アル實業家ノ渡般視察ニ對シ相當ノ便宜ヲ供スルト云フト雖モ吾人ハ一步ヲ進メテアラユル調査經營上ニ便宜ヲ與フルヲ必要ナリト信ズ。例ヘバ或地方ノ調査又ハ經營ニ對シ馬賊其他ノ危險アルトキハ適當ナル兵員ヲ派シ之ヲ護衛シ以テ事業ノ成功ヲ助クルガ如シ、駐屯軍ハ其職務ヲ有スルモノナリト雖モ、同時ニ之ヲ以テ實業發展ニ便スルガ如キハ事容易ニシテ且大ニカムベキコトナリ、單純ナル鐵道保護以上、吾人ハ駐屯軍隊ニ期スル所多カラザルヲ得ズ。

#### 五、鐵道事業ノ經營

東清鐵道ノ幹線ハ國有ヲ可トス、是レ將來ノ利益ノ豫想不確實ナルト株式募集ニ不便ナル等民業ニ適セザルモノアレバナリ。支線モ亦政府ノ力之ヲ布設スルヲ得バ國有敢テ不可ナリトセザルモ支線ノ布設ハ滿洲ノ産業ヲ開發シ貿易ヲ増進シ物貨ヲ大連ニ集中スル點ニ於テ一日モ忽ニスベカラザルモノアリ、寧口日清共同ノ資本ヲ以テ一日モ早ク之ヲ竣成スルヲ可トス。

軌道ノ廣狹モ亦議スベキモノアリ、露國式ノ五呎說ハ日露ノ鐵道ヲ聯絡シ鐵車一

路、大連ヨリ露都ニ通シ大連ヲ以テ歐亞交通ノ吞吐口タラシメントスルニアリ、然レドモ(一)浦鹽ハ不完全ナガラモ露領地内ニ於ケル西伯利亞線ノ終端驛タルニ足ル之ヲ廢シテ大連ノ如キ他國ノ領有ニ屬スル地點ニ西伯利亞線ノ終局ヲ求メテ結局利益ノ大部分ヲ他國ニ與フルガ如キハ露國ノ政策トシテ有リ得ベカラザルナリ、(二)同ジク露國式ノ五呎軌道ヲ用フルトスルモ、日本鐵道ニ據レル貨物ハ課税ノ爲メ検査其他ノ爲メ多少ノ混雜ヲ來タスベク、直通ノ便ハ殆ド之ヲ期シ得ベカラズ、(三)五呎ノ軌道ハ別ニ機關車其他ノ設備ヲ要シ他ノ軌道ノ機關車等ヲ流用スルヲ得ザルヲ以テ軍事上尠カラザル不便ヲ生ズベシ。

之ニ反シ韓國鐵道ハ勿論、牛莊ヨリ天津北京ニ通ジ、漢口ニ達スル鐵道ハ總テ四呎八吋ノ廣軌式ヲ採用セルヲ以テ此等ノ鐵道聯絡上同一軌道ヲ用フルハ最モ便利ニシテ且ツ必要ナリトス。吾人ハ五呎說ノ名ニ美ニシテ實ニ價ナキヲ排シ四呎八吋ノ日清韓三國交通聯絡ニ便ナルヲ取ルヲ欲ス。

安東縣ヨリ奉天ニ通ズルモノ、奉天新民屯間ハ輕便鐵道ナレバ速ニ廣軌式ノ本鐵道ニ改築シ清韓兩國内ヲ同一軌道、同一列車ヲ以テ運轉聯絡シ、以テ旅行上開拓上



ニ多大ノ便宜ヲ與ヘサルベカラズ。吉林ハ今日世人ノ度外視スル所ナルモ、山貨集中シ、麝香、野生人參、金、銀、錫、鹿ノ袋角等分量少ニシテ高價ナルモノ頗ル多シ、若シ吉林長春間ノ鐵道完成スレバ此等ノ物貨ハ營口大連ニ集中シテ莫大ノ利益ヲ與フヘシ。此間ノ布設經營モ亦急速ナルヲ要ス。

鐵道ト相待テ研究ヲ要スルハ大連ノ關稅トス。而シテ吾人ハ大連輸入ノ日本品ハ總テ之ヲ無稅トスベキヲ望ム。日本品ノ輸入無稅ナレバ我商品ノ販路ハ滿洲ニ擴張セラルベク、對日輸出稅ヲ免除スルトキハ日本ハ低廉ナル原料ノ供給ヲ受ケ滿洲開發上頗ル便宜ナルベキヲ信ズ。而シテ大連ニハ幅四百呎長七百呎ノ大棧橋アリ吃水二十八呎位ノ船舶ハ能ク橫附シ得ベキヲ以テ地勢上ヨリモ交通上ヨリモ大連ハ東洋貿易上ノ一要地タルベク、我橫濱神戸ト相待テ大ニ囑望セラル、ニ至ルベシ。

#### 六、資本供給ノ機關

交通機關整備シ而シテ政府ノ保護ハ實業家ヲシテ手ヲ滿洲經營ニ染メシムルニ足ルト雖モ、更ニ設備ノ全ク缺クルモノハ實ニ銀行ノ設立ナキニアリ。今日在留邦

人ハ信用モ資本モナク、從テ銀行ニ依頼スルヲ要セザルモノナレドモ、眞面目ニ滿洲經營ヲ計畫スルモノハ常ニ銀行ノ恩惠ニ浴セザルベカラズ。

正金銀行ハ支店ヲ一ニ地方ニ設ケツ、アリ、然レドモ同行ハ新企業家ニ對スル資金供給機關トシテハ慎重ニ過グ、確實ハ即チ確實ナルモ實業發展ニ伴隨スル能ハザルガ如シ。今日同行ノ主トスル所ハ銀票ノ回收ニアリ、清國資本ノ吸收ノ如キ亦多少之ナキニアラザルベキモ、貸附銀行トシテハ吾人不幸ニシテ多ク其活動ヲ聞カザルナリ。故ニ吾人ハ商業上ハ勿論、信用アル企業家ニ對シ相當ノ貸附ヲナシ得ル銀行ノ設立ヲ望マザルヲ得ズ。

獨逸國民ガアルゼンチン其他南米諸國ニ於テ他國民ヲ排シ獨リ専ラ成功シテ發展シタルモノハ其勤勉ナル特性與ツテ力アルベシト雖モ、研究者ハ之ヲ以テ彼等ガ背後ニ有力ナル銀行ノ後援ヲ有シ、必要ナル資金ノ供給ヲ得タルニ由ルト云ヘリ。獨逸人ニシテ尙且ツ然リ、吾人ハ日本人ガ滿洲發展ニ對シ金融的後援ヲ與ヘ、中途ニシテ頓挫スルヲ防ガント欲ス、創業ノ際清國資本ノ吸收ハ多少容易ナラザルモノアルベキモ事業トシテハ相當ニ有利ナルベキヲ信ズ。而シテ之ガ爲メ最初ノ

幾年間ハ多少ノ保護ヲ與フルモ亦止ムヲ得ザルベキカ。

### 七、民間ノ經營方針

民業トシテ經營スベキ事業ノ種類ニ關シテハ當業者各其専門ニ依リテ調査研究スベク吾人ノ所論ヲ要セザルベシ然レドモ吾人ハ滿洲經營ノ一要部トシテ民間實業家ノ奮勵ヲ望ムト共ニ大會社ヲ起シ小資ヲ合セテ共同事ニ當ルベキヲ勸告セント欲ス。是レ三、個ノ理由アレバナリ。

(一)清人ハ廉價品ヲ望ム、從テ之ニ供給スルモノハ大資本ヲ以テ大規模ノ事業ヲ營ミ生産費ノ節約ヲ講ズルモノニアラザレバ目的ヲ達スベカラズ、如何ニ滿洲人ニ適スルモノアルモ高價ナレバ清人ノ得意ヲ得ベカラズ。

(二)清人ノ需要品ハ價格ノ低廉ナルト共ニ又耐久堅牢ナルヲ要ス。從來我輸出品ノ一時盛ニシテ忽ニ頓挫スルハ粗製濫造ノ結果ナリ、價格低廉ナルモ製品粗惡忽ニシテ破損スレバ再ビ需要ヲ喚起スルコト難シ。個人ノ小資本ヲ以テスルモノハ一時ノ利益ニ惑ヒ不徳ノ行爲ヲ敢テスルナキニアラザルモ、大會社ハ永久ノ利益ヲ想フコト比較的ニ多キヲ以テ多少此弊ヲ防グコトヲ得。

(三)無益ノ競争ヲ除ク。個々ノ小資本ガ同一市場ニ競争シ總テガ共倒トナリ、甚シ

キハ外品ノ其間ニ乗ズルモノアルハ從來屢々見ル所ナリ、大會社ハ全ク競争ヲ除キ若クハ之ヲ少カラシメ、一手ニ我勢力ヲ滿洲ニ扶植スルヲ得ベシ。

現ニ膠州灣ノ獨逸人ハ支那人ノ嗜好ニ投シ廉價ニシテ銳利ナル剃刀ヲ作り爲メニ數十萬圓ノ利益ヲ得タリト云フ。是レ機敏ナル獨逸商人ノ規模大ナル効果ヲ示スモノニアラズヤ。吾人ノ聞ク所ニ依レバ滿洲ニ於テ一杯ノ饅餠十錢ニ値スト、饅餠ノ一例以テ他ヲ推知シ得ベシ。之ヲ獨逸商人ニ比スレバ天淵管ナラズ。發展ヲ期スル邦人ハ深ク此點ニ注意シ政府ノ保護獎勵ト相待チ上下官民相扶ケテ滿洲經營ノ事ニ當ルベキナリ(明治三十九年五月三十日談話)

### 七十、滿洲經營談(明治三十九年六月十六日)

及十七日電報新聞所載)

政府ハ勅令ヲ以テ南滿洲鐵道株式會社設立ニ關スル件ヲ公布シタルガ大體ニ於テ異議ハ無イ、元來自分ハ鐵道國有論者デ國內ニ於ケル鐵道ヲ國有シタ今日ハ殊

ニ然リテ國有ノ精神ハ何處迄モ貫達シタイノテアル、成程露國ノ如ク他國ノ領土ニ勝手ニ鐵道ヲ布設セント欲スル場合ニハ、或ハ東清鐵道ノ如キ私設會社ノ組織ヲ以テスルヲ適當ノ方便トスルナランモ、吾國ノ如ク已ニ正當ノ權限ニ依ツテ其幹線ヲ獲得シタ以上ハ敢テ之ヲ私設組織トスル必要ハ無イト思フ、乍併之ヲ私設會社トスルトモ其實政府ガ勝手ニ署理シ得ル譯デアルカラ今日國有非國有ヲ爭フガ如キハ枝葉ノ議論デアル、根本ニ於テ政府ノ大方針ガ確立シテ居ル以上ハ何チラデモ宜シイ名ハ鐵道守備デアルケレドモ實ハ他ニ大ナルモノヲ防禦シテ居ル譯デ恰モ戰前ニ於ケル露國ノ滿洲政策ト同一政策ヲ取ルノダト思フ、要スル所滿洲ハ事實上日本領トセザル可ラズデ、夫ノ機會均等主義ヲ顧慮スルガ如キハ取ルニ足ラザル愚策デアル

從テ鐵道總裁並ヒニ民政長官ハ前ニモ屢々云ツテ置イタ通り偉人大器ヲ以テ之ニ當ラシメンケレバナラス、我輩ガ茲ニ民政長官ト云フハ何ニモソウ云フ名ヲ附セヨト云フノデハ無イ、領事デモ宜シイ統監デモ宜シイ要ハ唯民政ノ局ニ當ル人デ經倫ノ大才デアレバ宜シイノデアアル、露國ノ遣方ヲ見ルト假ヘバ東トルキスタ

ンノ「カシガトル」ニ駐在シテ居ル「ベトロウスキ」ノ如キ同ジク領事デアルガ其勢力ニ至ツテハ非常ナモノデ地位モ樞密顧問官デアツタト思フ、是レ畢竟露國ガ此地方ヲ自分ノ領土トナサンノ企圖ヲ有ツテ居ルカラデ我輩ガ滿洲民政長官ニ大才ヲ用エヨト云フノモ全ク此意味ニ於テ云フノデアアル

吾國ノ將來ハ益々列國ト競争ノ地位ニ立ツ可キデ而シテ國家ノ領土ガ年ト共ト廣大ヲ來シツ、アルハ歴史ノ明カニ證明セル所デアアル、有史以來列國ガ興亡常ナラズ、時ニ或ハ羅馬ノ如キ大帝國ノ勃興シタルコトアルモ大體ニ通ジテ數百年前ト今日トヲ比較スル時ハ此傾向ハ彰々トシテ蔽フ可ラズデアアル、從ツテ苟クモ列國ノ間ニ介在シテ大和民族ノ繁榮ヲ計ラント欲セバ領土ハ可成擴張センケレバナラス勿論外交辭令ノ上ニ於テハ立派ナコトヲ云フモ可ナランモ事實ノ上ニ於テハ侵畧ニ非ラザレバ國家ノ繁榮圖ル可ラズデアアル、今日侵畧ノ餘地ハ未ダ決シテ少ナク無イ特ニ亞細亞大陸ニ於テ然ルニ非ラズヤ、而モ今半世紀モ之ヲ過ゴス時ハ多クハ列國ノ割據スル所トナツテ吾人ノ侵略ニ多大ノ不便ヲ生ズルコト、思フ

往事ヲ顧ミレバ太平洋ノ諸島嶼何レモ列國ノ勢力外デアツタ爲メ強國ハ自由勝手ニ之ヲ占領スルヲ得タガ今日ハ果シテ如何デアルカ「ラドローネス」島モ「マーシヤル」群島モ乃至「カロリン」群島等一トシテ主人ヲ有セザルモノハ無イノデ此方面ニ於テハ已ニ戰ヲ以テスルニ非ラザレバ一寸ノ地モ之ヲ獲ルニ苦シム有様デアル而ルニ亞細亞大陸ノ土地ハ名義上露國清國等ノ領土テアルケレドモ侵略ニ向ツテハ尙多大ノ餘地ヲ殘シテ居ル今日滿洲ニ割據シテ占領ト同一ノ勢力ヲ扶植スルニ非ラズンバ亦何レノ秋ヲ俟ツテ領土擴張ヲ遂ゲ得ルカ侵略ハ今後益々困難トナルカ一旦滿洲ニ割據シタル以上ハ機ニ臨ミ時ニ觸レ日本ノ勢力ヲ伸バスコトハ差シテ難事テモアルマイ北面シテハ露西亞ヲ制シテ「バイカル」以東ノ地ヲ掠シ西面シテハ支那ヲ討伐シテ四百餘洲ヲ蹂躪スル是レ我國カ當然採ル可キ國是デアアル

素ヨリ平穩無事ノ時代ニ於テ敢テ兵ヲ擧ゲテ侵略セヨトハ云ハヌガ他日何カノ事件ノ爲メニ外國ト戰フノ必要ヲ生ジタ場合ニハ必ズ此ノ覺悟無カル可ラズト云フノデアアル之ヲ露國ノ將來ニ鑑ミルモ三十七八年ノ戰敗ヲ以テ屈服スル様ナ

國柄デハ無イ早晚再ビ南下運動ニ着手スルノハ分リ切ツテ居ル少ナクトモ印度境上ニ打ツテ出ルノ志ハアルノデ若シ愈々百万ノ露軍ガ印度ニ押寄せルコト、ナルト印度ニ於ケル英國ノ地位ハ累卵ノ危サデ同盟國ノ厚誼上我國ハ是非此方面ニ大活動ヲセンケレバナラス此時ニ處スル吾國民ノ大覺悟ハ宜シク今日ニ於テ充分ニ用意スベキデハ無イカ

斯ノ覺悟ヲ以テ滿洲ニ割據スル以上ハ東洋ノ平和ヲ維持スルト否トハ全ク日本ノ權能吾人ノ自由勝手デアアル反之日本ガ主人公ノ地位ニ立タズシテ客ノ地位ニ立ツモノト假定セバ平和ト戰爭トヲ決スルノ權ハ日本ヲ去ツテ他國ニ移ツテ東洋ノ霸權ヲ握ルコトヲ出來無クナリ從テ日本民族ノ繁榮得テ望ムベカラザルニ至ルデアラウ世間デハ我輩ノ議論ヲ聞イテ驚ク者ガアルカモ知レナイガ我輩ノ所論ハ決シテ卓上ノ空論デハ無イ今日我輩ノ說ニ從ハ無カツタナレバ他日必ズ戸水ノ言ニ從ヘバ宜カツタト悔ユルデアラウ此ノ如クニシテ我輩ハ先見ノ明ガアツタト言ハルハノハ我輩一個ノ爲メニハ有難イカハ知ラヌガ戸水ヲシテ名ヲ成サシムル所以ハ國家ヲシテ名ヲ成サシメサル所以デハ無イカ

要スルニ吾輩ハ滿洲ニ日本ノ勢力ヲ扶植スルノヲ主眼トスルノデ、何ニモ滿洲ノ開放其事ニ反對スル者デハ無イ開放ハ飽ク迄開放スベキデ之ヲ開放センケレバ第一外資ヲ輸入スルコトガ出來ナイ譯デアアルガ、開放ハ他國ノ領土ヲ開放スルニ非ラズシテ自國ノ領土ヲ開放スルト同一ノ考ヲ以テ開放センケレバナラスト云フノデアアル、飽ク迄機會均等主義ニ拘泥シテ正直ニ列國ト利害ヲ均一ナラシムルヲ計ル様デハ日本ノ外交ハ大失敗ニ終ルト信ズル

從來日本外交ノ遣リ方ハ西部歐羅巴ノ外交ト同シ型デアアルガ苟クモ東洋ニ於テ事ヲ爲サント欲セバ西歐式ハ大ニ不便デアアル、是非露國式ニ遣ランケレバナラヌ露西亞人ハ列國ニ對シ頗ル不遠慮デアツテ何事ヲ爲スニモ眼中列國無イト云フ勢デアアル、日本ノ外交モ是非此遣方ヲ學ブ可キデ若シ之レガ爲メニ列國ト衝突ヲ生ズル如キアラバ又之ニ應ズベキ策ハ、有ルデハ無イカ、要スルニ外交ハ決シテ「ハイカラ」式デハ不可ナイ、出來得ル丈蠻風ヲ加味センケレバナラヌ、敏腕以上ノ辣腕ヲ振ハンケレバナラヌ、而シテ之ガ經綸ニ當ル可キ人才ニ至ツテハ現狀ヲ打破シ情實ヲ打破シ、廣ク之ヲ朝野ニ求ムルナレバ人物ハ湧クガ如ク輩出スルデアラウ

云々

21-5N-27

明治三十九年九月十三日印刷  
明治三十九年九月十八日發行

定價金貳圓五拾錢

禁漢譯



著者 戶水寬人

麴町區飯田町四丁目二番地

發行者 江草斧太郎

神田區一ツ橋通町七番地

印刷者 松澤 玘三

麴町區下六番町十七番地

印刷所 (電話番町) 同 勞舍

(電話番町) 同

麴町區下六番町十七番地

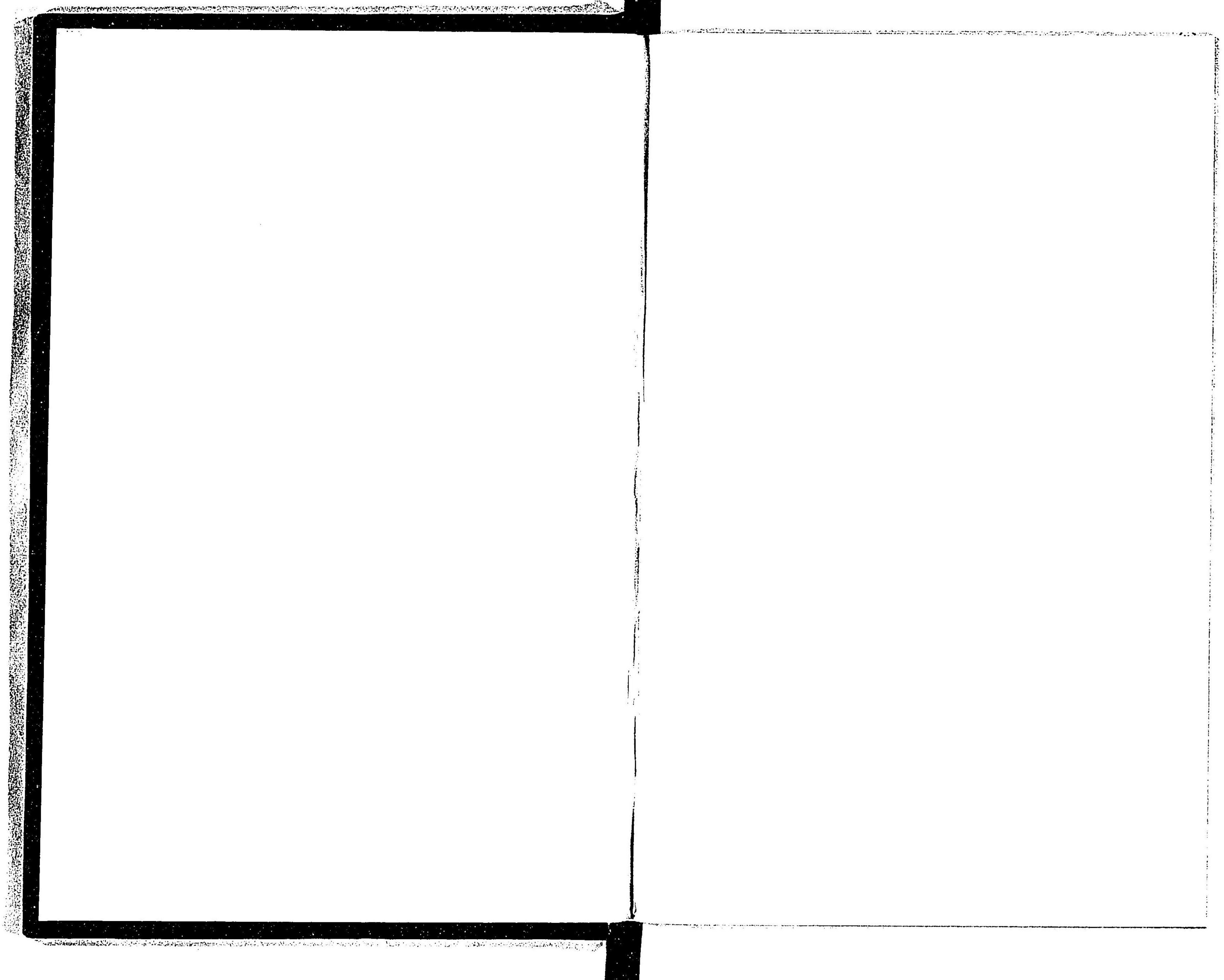
發行所

(電話本局三三三番)

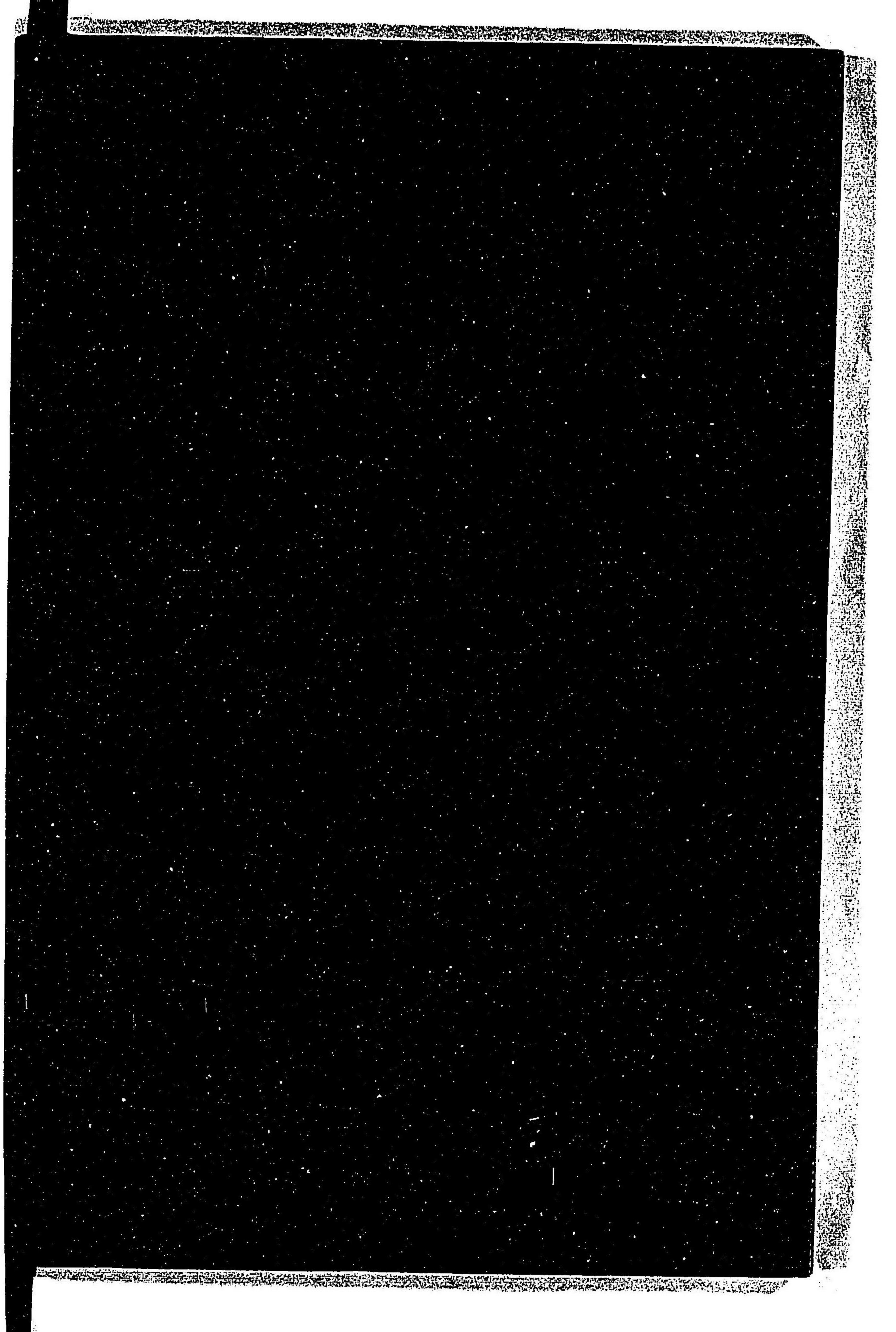
有斐閣書房

神田區一ツ橋通町七番地

5N-29







210.67

T0523R

